HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	二十一世紀の日本人 : 家畜人間社会の終末シナリオ
Author(s)	鈴木, 延夫
Citation	北海道大學文學部紀要, 47(1), 183-257
Issue Date	1998-10-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33715
Type	departmental bulletin paper
File Information	47(1)_P183-257.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

二十一世紀の日本人 ——家畜人間社会の終末シナリオ——

鈴木延夫

——まえおき——

世界中で長く戦乱のつづいた二十世紀も余すところ千日を切った。世紀末という言葉が特別な意味で語られる昨今、次世紀に持ち込まれる人類全体の課題も数知れない。地球温暖化、オゾン層の破壊、地下資源エネルギーと森林資源の枯渇問題に代表される地球環境問題の深刻さはいうに及ばず、我々日本人の身近な社会の中にも克服すべき課題が山積している。

常に権力と金力の亡者で構成されてきた政治家集団（政界）の慢性的腐敗、昨今のバブル崩壊に象徴される財界人の愚かさ、国家や地方権力機構に身を寄せる無数の役人達の違法経理操作問題と繰り返される贈収賄事件。こうした現実を目の前に並べれば、日本という国家や社会が今やヘドロの海に沈降しつづけていることを、誰も否定できない。

視点を市民生活に向ければ、地下鉄サリン事件で日本人全体を揺り動かしたオウム真理教問題から青少年世代に広がる麻薬乱用と性秩序の混乱、さらには中学生に現在集中して発生する「いじめ」問題や殺人事件。これらの諸問題もまた、二十世紀末から次世紀に持ち越される深刻な課題であることに異論はなかろう。

一世紀百年という時間単位に特別な意味は考えられない。地球の運動や生物全体の基準でいうなら、一日とか一年にこそ意味はあっても、百年という単位に特別な意味を見い出すことなどまったくできない。だから、二十世紀末現在のこうした国内外の深刻な混乱や課題を考える際、世紀末という点に注目して議論するのは星座占いや血液型性格診断の愚かさのレベルと区別し難い。しかし、これらの問題から世紀末議論を除くにしても、今や解決不能に見える無数の課題は人間社会全体、あるいは日本という国家とそこに生きる日本人にとって避けて通るわけにいかない難題である。

マスメディアが発達した今日、これらの難題に関わる情報が不足しているとは思えない。また、日本という国家や国民の中から良識や理性が完全に消滅しているとも思えない。なのに、これらの課題や難題が一方的に増幅しつづける現実はどこに、どのような原因が存在するのだろうか。

因果論でいうなら、ここに並べた諸問題や課題はすべて結果に含まれる。それらは多様なマスメディアによって簡単に捉えられ、時間を惜しむかの如く国民や市民社会に伝えられる。だから、我々人間の情報不足や知識の欠落によって問題が見過ごされている、とはいい難い。あえていうなら、新聞やテレビから押し寄せる情報の過剰性に翻弄され、我々一人ひとりが課題や問題から身を避けている、ということはあるかもしれない。

冷静に考えると、我々人間が抱える良識や理性が個人としてまた集団としてこれらの課題で機能しない理由には

もっと質の違う原因もある、ということはいえないだろうか。たとえばフロンガスとオゾン層の破壊関係にみられるような、原因が発生してから結果が生ずるまでの時間的ずれに注目した場合、我々人間が常に自画自賛してきた理性や良識の発動する場面はどこにあるのだろうか。また、複合汚染や酸性雨問題のような時間と空間が同時にずれて発生する大規模な環境問題などの場合、人間の理性に限らず、知性についても因果関係の理解に一定の限界があるだろう。

私は太平洋戦争直後の混乱期に黙々と耐えて生きる両親の下で育った。あれほど悲惨な結末を前にしながら、一億総玉砕を唱えて間もなく無条件降伏を受け入れた日本人、その責任の所在を東京裁判に任せて自己の問題として捉えることを止めた日本人の子供として育った。それ故、私は伝統的な人文社会学は勿論、その類の学者や研究者にも、信頼を寄せることができない。

それでも、私は人間であること、日本人であることから逃げ出せない。だから悩み、だから苦しんで生きる道を辿ってきた。また、それでも生きることを止められないと観念した時、自己納得のための人間研究あるいは人間社会の研究が目の前に開けた。

本論文では多くの人々が先験的かつ盲目的に共有してきた他動物に対する人間の優位性、もしくは絶対性に関わる疑問を出発点とし、他者理解や異民族理解といった人文社会学研究領域の片隅で諸動物を研究した立場から、独自の現代日本人論と次世紀に生きる日本人の姿を大胆に予測したいと考えている。ただその前に一つ、断わるべきことがある。

昭和五十年代前半、我が国で最初の学際的研究のはしりといわれる行動科学科が北大文学部に開設された当時、私

は少数民族と野生動物の壁を取り除き、同一平面上で対象を理解しようとする領域のメンバーの一員としてこれまで多くの野生動物研究を試みてきた。しかし、そこで組織的かつ体系的な成果を獲得する以前に、現代文明や産業社会の際限のない環境破壊に直面し、研究のフィールド自体を放棄する事態に追い込まれた。

私の研究の中で最も我々人間に近い野生動物として手懸けた青森県下北半島北部のニホンザル研究の場合は、昭和五十年代当初に始まった原子力発電所の誘致や推進運動に脅かされ、本格的調査開始後三年目の昭和五十四年で現地を放棄することになった。

次に着手した北海道のキタキツネ研究では理想的なフィールドだった日高山麓の調査地はいまだ中止か続行かで議論の絶えない苫小牧東部開発に伴う沙流川ダムの建設事業で、無条件撤退を余儀なくされた。また、同じ時期に比較対照群を求めて出掛けたオホーツク海の能取岬では大韓航空機のロシア軍による撃墜騒動に巻き込まれたり、調査開始後数年以内にフィールドの大半が地方自治体運営の遊園地化事業に遭遇し、昭和五十年代末までに撤退以外、道はなかった。

その後、フィールドを国内から海外のアラスカに移して始めたハイイロオオカミの研究でも、諸外国（日本人を含む）の金持ちハンターを相手とするレジャーハンティングガイドの白人の生活保証を理由に、アラスカ州政府は私の選んだフィールド一帯の群れをもヘリコプターとライフルで追い回し、決定的ダメージを加え、研究自体の内容を根本的に破壊してしまった。

また最近着手したカムチャッカ半島沖のトド研究でも、私が当初に考えていた社会生態学研究本来の研究条件は最初から満たされていない。繁殖期に限ってハーレムをつくる海洋哺乳動物の一員として有名なこの研究対象の場合、

生息数の激減現象の原因を探り、種の絶滅を如何に防ぐかという課題が国際会議で設定され、たとえ調査や研究上のフィールド自体がとりあえず確保されているのせよ、人間との比較対象として相手を組織的に観察する時間も条件もなかった。

したがって、ここで展開する日本人論は私の研究成果そのものを前提にしていない。そのかわりに、これまで三十余年に及ぶ様々な動物の観察と研究を通してごく自然なかたちで念頭に浮かんだ日本人の特徴や傾向について、時間系列と対象動物の違いに沿ってオムニバスに並べてみた。これは本来、もっと系統的に体系化すべきものであり、論者の構成力の欠如が問われるべきものであろうが、その点の配慮が戴ければ幸いである。

本論ではまた、一番重要な日本人そのものの概念規定が欠けている。自分が日本人として生まれ、その中で生きつづけてきた故に、「木を見て森を語る」という言葉が頭をかすめ、断定的な概念規定に躊躇を覚える。したがって、本論の是非を問題にする場合、各自各様の日本人のイメージを心に浮かべながらご検討戴ければ幸いである。

参考文献

家永三郎「戦争責任」、岩波書店、１９８５年
ＮＨＫ取材班「動物と人間」、日本出版協会、１９８５年
川名英之「地球環境破局」、紀伊国屋書店、１９９６年
立川昭二「こころの日本」、文芸春秋、１９９７年
Desmond Morris 「The naked ape」, Jonathan Cape, 1967, London
中島克己・林忠吉「地球環境問題を考える」、ミネルバァ書店、１９９７年

―実験動物心理学の限界（昭和三十年代後半～四十年代前半）―

この時代、旧帝大といわれた北大を含む国立七大学、あるいは早稲田・慶応といった日本の著名な私立大学の心理学研究室では人間を対象にする場合の知覚研究と動物を対象にする場合の学習と動機の研究が盛んに行われていた。選択肢の狭いその二つの領域の中から、私は後者の実験動物心理学を選び、先輩や先生の指導を受けながら研究室に閉じ篭る毎日を送っていた。

研究資金が乏しかった当時、実験に使える動物の種類は限られ、手軽で安価なネズミ、ハムスター、モルモット以外、相手にできる状況でもなかった。

生後三～四週間程度で、離乳した直後のこうした実験用の動物達は狭い木箱に詰められ、一般の繁殖業者から商品として大学に届いた。それに合わせて、私達はブリキと針金を組み合わせた縦横三十センチから四十センチ程度の小さな飼育箱を造り、手元に届いた日から粗末な雑穀と水を与えるだけの世界に彼等を閉じ込めた。

当時、一つの実験には三十匹から六十匹程度の動物を使ったが、そうした悪条件の中でも、わずか百グラム程度しかない幼獣のネズミやハムスターにしても、実験飼育中に死亡する個体はきわめて少なかった。また、実験飼育期間を通して、どんな条件下でも、これらの動物から抵抗を受けたり、噛みつかれて怪我をするような事態も起こらなかった。

アメリカの医学、とくに実験生理学上の要請で育種され、開発されたというこうした動物達は、実験心理学を進める上でも、まったく理想的な実験材料だったといえるかもしれない。飼育に手間が掛からず、研究上の要請に基づく飢餓条件や電気ショックにもよく耐え、死亡する危険もノイローゼで衰弱してしまう個体も少なかった。ましてや、もし実験遂行上で都合の悪い個体が出れば、補給の点にも何一つ問題は生じなかった。

最初の研究課題でアルコール中毒の実験をやった時など、離乳直後の子ネズミに濃度を幾段階かに分けたアルコールと餌だけを与えた。それから予定された期間の実験観察を終えると、行動や学習能力面で異常現象を起こした生理的原因を求めて無数のネズミの頭を叩き割り、副腎や脳下垂体といった内分泌系のホルモン組織を無造作に取り出した。そして当初予定したデータが収集できると、私達は山積みされた実験動物の死体を無造作にゴミ箱に捨てた。

結果が出た半年後、その成果は日本動物心理学会で報告され、ごく自然で当然の如く、学会誌に価値ある研究論文として受理された。通算二年に及ぶこの一連の研究活動の中で、一番の若輩で知識も技術も劣る私は無我夢中で研究室に通い、手にした論文の片隅に自分の名前を見つけて無邪気に喜んだことが、いまもって記憶に残る。

しかし、大学院に入って間もなく、私は自分の研究生活に疑問を覚えた。一体、自分はなにをしようとしているのか。こうした類の研究を積み上げた先に、なにが見えてくるのか。考えてみると、すべてに疑問が重なり、罪の意識を伴う嫌悪感が胸を塞いだ。

確かに、アルコール中毒の研究自体、我々人間社会の歴史的問題や課題としてやることに意味があった。ただ、そこで無数の実験動物を犠牲にすること、さらにその犠牲を当然と受け止め、自分の研究業績にしている自分という存在に疑問が起こった。

また視点を変えると、生命を持ってこの世に産れ、どこか適当な環境で自立しながら生きる可能性を秘めた筈の動物が自分の宿命にまったく気付かず、時には研究者という独善的な人間に甘えたり依存する姿を見せながら短い一生を終えるという現実や事実にも、不可解な思いが重なった。

私にとって唯一の研究課題は人間が生きるという事柄に含まれる矛盾と不可解さにあった。他者という存在を求める一方でその他者を苦しめ、生の充実を求めながら生の虚しさに苦悩する人間。文化や文明を自ら発展させながら、それらに押し潰されてしまう人間の奇妙さ。そこにこそ問題があり、研究すべき課題があった。

だが、ここに紹介したアルコール中毒の研究を含めて、実験動物研究の基本的枠組み自体に疑問が生ずる。ネズミにせよモルモットにせよ、彼等は生きた動物の姿こそすれ、そのすべては培養された細菌類と変わらない。人間の目的に沿って都合よく作り変えられ、誕生から死に至るすべての時間の中で自立した生活がまったく許されない。

アメリカ流の実利主義から実験動物学を進めようというなら、話は分かる。しかし、人間性の探究を前提として実験動物の置かれた状況を考えると、彼等は決して人間研究の材料になりえない。

二十世紀前半から推められた実験動物心理学において、人間性の重要部分にあたる学習とか、習慣の形成といった分野に科学的研究成果は認められる。記憶の成立、あるいはその忘却といった興味ある問題でも、実験動物心理学の果たした貢献は否定できない。だが、研究成果に一般解を求めて科学的研究を推進させる限り、要素構成主義の限界が目前に迫る。

人間性を包括的に理解しようとする時、人間性に含まれる要素は無限にあるのではないか。しかも、一旦そうして細かい要素に分解してしまうと、研究成果全体を再構成する道は一体、誰がいつになったら見い出すことになるのか。

その予定が前提になければ、こうした科学的心理学自体が自己完結した学問として成立しない。

後日に加わった知識と経験に立っていうなら、私が最初に選んだ実験動物学もしくは実験動物心理学は人間性の探究を当初から目的にした学問ではなかった。その背景には常にアメリカ流のプラグマティズムが存在し、戦争に使うロケットの操縦を動物に訓練したり、ティーチングマシーンの製造を心掛ける含みがあったようだ。

ここにはもう一つ、歴史的に隠されたある事実が関係している。一九六〇年代のベトナム戦争で活躍した米軍の特殊部隊やグリーンベレー部隊員の訓練において、陰の主役になっていたのが実験動物心理学者だった、という話がある。四方が鬱蒼としたジャングルにおいてゲリラ戦をつづける場合、周囲で起こるすべての刺激に反応し、銃を向けて即座に発砲する訓練では、ネズミやモルモットを用いた電気ショック実験の成果が生かされた。しかもその戦争後、自国に戻ったアメリカ軍兵士の中で、自宅で朝起こしにきた母親を反射的に撃ち殺すという悲惨な事件が発生している。また、その衝動を自分で制御できないと感じた数千人のベトナム退役軍人が北米のロッキー山脈に姿を隠し、終生家族とも仲間とも付き合う生活を放棄した、という歴史的現実を記憶に残す人はいるだろうか。

いずれにせよ、昭和三十年代から五十年代前半にかけて、私が最初に手掛けたようなネズミやモルモットを用いる実験動物心理学が本家本元のアメリカで社会的に厳しく追及され、急速に衰退する中で、この学問を日本に持ち込んだ我が国の学者や研究者が当初からこの学問に内包される不毛性と犯罪性に気付かず、欧米の専門誌に送った論文の拒否理由すら理解できなかったという事実こそ記憶に残したい。

医学生理学で成功した技法をそのまま人間性の研究に適用した実験動物心理学の挫折。プラグマティズムという哲学や価値観を見落とし、実用科学を基礎科学と誤解して科学万能主義の時代風潮に参画しようとしたこの学問の推移

の中に、昭和三十年代一斉に我が国で開花した米国産科学の典型が見えてくる。

参考文献

藤永　保・金城辰夫「学習・記憶・思考」、東洋・大山正他編「心理学の基礎知識　第四章」有斐ブックス、１９７０年
G.S Reynolds,「A Primer of Operant Conditioning」, Scott, Foresman and Company, 1975, Glenview
鈴木延夫「シロネズミの成長に及ぼすエチルアルコール摂取の影響」
結城錦一先生退官記念論文集、pp.75～82、１９６４年（共著）

―日本霊長類学の功罪（昭和四十年代後半―五十年代前半）―

人間性の研究に培養微生物と変わらない実験動物を持ち込んだ学問の不毛性を意識し始めた頃、私は自宅の室内で成長する犬の知的、感情的豊かさに注目していた。本来、北海道の極寒期に生後一カ月程度で路傍に捨てられていたこの牝犬は、餓死か凍死寸前の状態から回復すると同時に、素晴しい知能の発達を見せる犬に成長した。

大学で毎日飼育している実験用の動物には、自己主張も喜怒哀楽といった感情も見い出させない。実験上で強制的に与えられる飢えや電気ショックにこそ反応はあれ、あとは狭い実験飼育箱の中で終日うごめくただの有機体に過ぎなかった。しかも、そうした極悪な生活環境の下で精神病で倒れるものも少なく、死に至るものも少なかった。しかし、人間と一緒に室内で寝起きするこの犬には我々人間に備わった通常の感覚で理解し共感できる自己主張や豊かな

感情が認められた。

ところが、我家が突然の不幸に陥り、室外に追われて飼主の保護を一時的に受けられなった時、この飼犬の限界が現われた。突然襲った状況変化の下で、この犬は自分を救う路さえ知らなかった。飢えても餌を探せず、すぐ不安と孤独に怯え、強度のノイローゼに陥って衰弱の一途を辿った。

飼主の手元を離れて一カ月後、表情こそ固くなっていたが、この飼犬はまだ生きていた。そして不可解ともいえるこの事実の背景を物語る存在が、その脇に悠然と構えていた。それは生来の野良犬で、数カ月前から我家を根城にしていた一頭の牡だった。

無味乾燥な実験動物からこの飼犬に目を向けた時、確かにそこには感動があった。しかし、人間の保護下でしか輝きを見せない飼犬に比べ、それを仲間として受け入れ、共に生きる知恵と能力を持った野良犬に出会ったことは、さらに大きな感動を呼び起こした。

我々人間が単なる生物以上の存在であるとするなら、自活しながらさらに仲間さえ臨機応変に救えるその野良犬の場合も、我々人間に匹敵する存在か、それに近い生物だと私は当時考えた。

そこである時期、人間性理解の一助として野良犬の習性や社会を研究することを考え、個体識別の徹底を前提とする生活史の全貌の解明に努力したことがある。

この研究に着手して五年、野良犬の研究自体が現実的に不可能なことを知った。確かに、彼等の誕生や成長過程の途中までなら研究といえるだけの観察も可能だった。また、一定の限界はあるにしても、何故、牡犬が片足を上げて排尿するか、どのようにして集団を造り、そこに出現する社会的階層性（ソーシャルランク）がいかなる条件によっ

て成立するかなど、実験動物研究で要請される前提条件の範囲内でも、研究可能なことも十分理解できた。しかし残念なことに、これらの野良犬研究では一つ決定的な障害が問題だった。

我が国では昭和二十年代半ば以来、狂犬病予防法という法律によって、国内に生息するすべての犬の飼育に厳しい規制が設定されてきた。そこで犬が犬としての生存権を得るには、毎年実施される狂犬病の予防注射と登録が義務付けられ、それ以外の野良犬すべてが都道府県の権限で実施される野犬狩りの対象となって、自然死をまっとうする個体はきわめて限られている。だから、我々人間との比較対象として野良犬の生活を追及していると、生活史の後半部分から死に至る過程が対象となりえない。またたとえある一頭の個体の一生を追及できたとしても、その仲間や家族の多くが野犬狩りによって人為的に消されてしまうために、動物社会の基本的な研究条件に障害が発生することになる。

昭和四十年代前半、戦争直後の日本に一つの学問が誕生していることを知った。それが今西錦司氏に率いられる日本霊長類学であり通称、日本のサル学といわれた一連の研究である。

「生物社会の論理」あるいは「私の進化論」など数多くの著述と幅広い講演活動で有名な今西錦司氏は、学問や研究に厳密性と科学的常識を求める一般の生物学者の間で評価が低い。その一方、広く社会的視点で見ると、敗戦後の虚脱感に覆われた時代背景の下で、今西錦司氏の世界に類例のない独創的発想には数多くの賛同者も出現した。

今西理論の基礎にあるのは伝統的進化論から如何に抜け出るかという点にあり、個々の生物の形態や生態学上の進化に注目する代わりに、環境に合わせた生活や社会進化の原因と方向を探ることにある。また今西理論の背景には十九世紀にヨーロッパの文明社会で発達した博物学、つまり個々の生物と生物界全体の存在メカニズムを人間の経験事

実や体験から包括的に捉えようとする姿勢が顕著に認められる。

動物の社会を構成する個体自体の進化と、その個体によって構成され出現する社会の進化を等間隔で捉えることの必要性、および生物社会全体の安定したバランスの発生原因、あるいはチャールズダーウインに代表される生態進化論に対抗する独自の社会進化論の確立。そうした学問上ではきわめて野心的意欲と発想の中に、今西理論は特徴づけられる。

第二次世界大戦前に固められた今西理論において、最初の組織的かつ実証的研究となるのが戦争直後に着手されたニホンザルの研究であり後日、京都大学や日本モンキーセンター等を中心にして活躍した伊谷純一郎・河合雅雄・川村俊蔵氏などがその直弟子にあたる。この独創的ニホンザル研究の組織化や発展の経緯については社会評論家の立花隆氏の「サル学の現在」に委ねるが、ここではニホンザル研究に内包される二つの側面、すなわち人間社会の成立に関わる進化経路をニホンザルや他の霊長類研究から求めようとした発想の功績と犯罪性について言及したい。

敗戦直後の日本において、多くの学者や研究者は戦勝国アメリカに活路を求め、それまでドイツを中心としたヨーロッパ諸学に傾倒していた日本へ米国流の合理主義に基づく学問を持ち込むことで納得する風潮が顕著に広がった。そうした状況の下で、歴史的に伝統のあるヨーロッパにも、また米国流の学問にも迎合しない一つの視野の広い研究領域を樹立した点で、今西理論と同時にニホンザルの一連の研究には貴重な存在としての価値がまず評価されねばならない。とくに、戦争という愚かな行為に没頭し、自ら破滅の淵に埋没しようとする当時の日本人社会を目前にして、それすら霊長類の社会進化の頂点に立つ人間の姿だと主張するこの学問と研究には、京都学派に共通する独創的人間探究の姿勢がうかがわれ、さらにそこで知的にも社会的にも発達したニホンザルの集団生活を発見して研究の対象と

したことに、大きな意味が存在する。

しかしその反面、人間の地域社会学や文化人類学を念頭においた一連のニホンザル研究の技法や誤った認識については、学問上決して許されない重大な過失が認められる。

日本という国は本来、豊かな広葉樹林に覆われた島国である。それ故、この国に棲み着いたクマもシカもサルも、深い広葉樹林に依存して生きる動物であり、森林に適応して生活する知恵を個々に身につけた動物として長くこの国で世代を重ねてきた。そして日本に米作文化が持ち込まれて以来、これらの動物は人間との接触を避け、森の奥に潜んで生きる動物に変わった。

いうまでもなく、我々日本人は伝統的に動物を知らない。現代に残る古い時代の動物画の中味は写実性に乏しく、多くの場合、神話や伝説に沿って歪曲され、人為的な解釈の中で怪しげな存在として描かれている。その点は動物の殺傷を禁じた仏教の定着によってさらに加速され、典型的な動物音痴の日本人を造り上げた。またそれ故、我々日本人は野生動物の生活や習性に興味を持たず、明治時代以降速やかに取り入れたドイツやイギリスの学問の中からも敢えてその領域を取り除く態勢で戦後を迎えた。

昭和二十年代半ば、今西錦司氏の下で開始された一連の動物社会研究では当初、奈良公園のシカや飼いウサギ、あるいは宮崎県の都井岬に生息する半野生馬の集団生活が動物比較社会学の立場から問題とされ、大分県高崎山のニホンザル研究と同時に、その第一成果集として「日本動物記」全四冊が出版されている。

だが、動物の社会から人間社会への進化を厳密に追及するとなれば、ニホンザルには研究の推進上、決定的障害が最初にあった。それはいうまでもなく、ニホンザルが森林性の動物であり、無数の樹木と枝葉に隠された世界で生き

る野生のサルの生活が適切な観察を許さないという現実である。

ヨーロッパで発達した博物学では豊富な自然観察の後に実験観察が行われる。自然界に生息する動物を研究する場合、こうした二つの手法は鳥にせよ昆虫にせよ、常に相補的関係にあって、かつその順序も人為的影響を排除した自然観察から分析的な実験観察へと進めることが必須条件と考えられる。したがって、この学問を伝統にするヨーロッパの学者達は森林に隠れたり地下に潜って生活する哺乳動物を対象から取り除き、アリやハチなどの社会性昆虫、あるいは集団性の強い魚や鳥の仲間に限って研究を進めてきた訳である。

ニホンザルの研究に着手する際、今西錦司氏はこうしたヨーロッパの博物学に深く精通していた。それは単なる研究成果の認識に止まらず、研究の基本的手法に含まれる重要性の認識も当然含まれる。したがって、新たに着手するニホンザルの研究でも自然観察こそ必須のものであり、それなくして自らの研究に意味を見い出せないという事情が今西氏の前にあったと考えられる。

地域社会に生きる人々の正確な戸籍や血縁関係の記録に相当するものをニホンザル研究に求めるとすれば、終日森林に隠れ棲む相手は問題にならない。研究者は四六時中観察する必要があると同時に、誰が誰と交尾し、誰がいつどのように出産するかといった全過程はもとより、一つの地域に集まって生きるニホンザルの社会全体をも、常に観察できる条件が求められる。そこでこの二律背反事象を解決する方策が考えられ、開けた広い空間にニホンザルの群れを誘い寄せる手立てとして、いわゆる「餌づけ」操作が考案された。

京都府の近郊で「餌づけ」を試みた間直之介氏の記録によれば、野生のニホンザルではこうした「餌づけ」に対する抵抗性がきわめて強い。リンゴやサツマイモなど、ニホンザルが大好物とする食物を使うにしても、本来の森林生

息地から開けた場所に群れを誘導するには少なくとも半年、長い場合は二年という歳月が必要となる。

それでも、研究者が粘り強く努力する限り、ニホンザルの群れは人間の前に姿を現わす。そして現在、京都の嵐山や大分県別府市の高崎山に見られるような野猿公園のすべては、こうした「餌づけ」手法によって実現したものに他ならない。

ところで、ヨーロッパの博物学を基本とする限り、かくして研究者の前に姿を現わしたニホンザルの群れは、厳密な意味で野生の習性を維持していることが望まれる。またそれ故に、森林の中で生活していた時代の習性を知らない初期のニホンザル研究者は今西氏を含めて、目の前に現われた相手を純野生の動物と捉え、すべての学会でもその点を繰り返し主張してきた。しかし、マタギのような山奥で生きる人間生活と平野部の米作地帯に生きる人間の生活とが基本的に違うように、森林生活者のサルと開けた場所に集められたサル達に決定的相違が起こるのはいうまでもない。

第一に、樹木が密生した森林の中では観察する人間はもとより、ニホンザル同士の関係でも視覚という感覚は余り役に立たない。その代わりにシカやクマ同様、野生のニホンザルも聴覚に依存した生活をつづけ、個体間の距離を適当に保ちながら社会関係を維持している。そうした状況でサルは互いに仲間の顔や姿を視覚で確認することも少なく、音声を伝達手段に使いながら日中の活動時間帯には広く分散した生活を送る。しかし一旦、人間の意図にはまって開けた餌場に集まってしまうと、個体間の距離が異常に接近するばかりか、終始仲間の姿や態度を眺めながら生活する新たな社会状況が生まれる。するとそこから集団生活の基本様式が崩れ、音声依存型から視覚依存型への移行が起こる。

第二に、野生のニホンザルは本来、樹間を渡り歩きながら生きる遊動遊牧型の生活者であり、日々泊まる場所を変えて生きる動物であったが、終日餌場に定着するように誘導させられた結果、その基本的生活パターンが破壊されてしまった。またそれと同時に、無限に広がる樹木に食物資源を求めていた野生ニホンザルの食生活は、仲間全員が注目する特定の餌に集中させられた結果、互いに仲間同士で利害が対立するゼロサムゲームのような社会的葛藤事態に追い込まれた。その結果、ニホンザルの群れ生活自体は相互に依存し、助け合う社会から対立社会に移行した他、群れを率いるリーダーの必要性がなくなる一方、リーダーから性格を変えた独善的ボスの出現と日常生活全般に影響する個体間落差（ソーシャルランク）が必然的に生まれた。

第三に、森林の中で生きた野生のニホンザルには元来、密猟者と野犬・山犬といった二種類の天敵が存在し、他の野生動物と同様に狭い国土の中で緊張感の高い生活を送ってきた。それが餌場に集まって暮すようになると研究者という保護者の出現によって、密猟者や野犬・山犬など天敵のまったくいない特殊な環境条件が出現した。

ところで、ここにまとめた三つの状況変化は野生ニホンザルの集団生活を本質的に変えてしまったのはいうまでもない。だが、先駆的研究者の中ではその事実を認識することもできず、またニホンザル研究に託した今西理論の制約からしても、研究対象のこうした急激な変質や家畜化ともいえる実態を受け入れる余地はなかった。しかも、そこで集められたニホンザル研究の成果は一般の日本人に理解しやすく、かつ日本人社会と「餌づけ」されたニホンザルとの驚嘆すべき類似性によって、こうした初歩的問題点に関わる研究者としての良識すら、働く機会がなかったということかもしれない。

いずれにしても、戦後日本人の手によって開始されたニホンザル研究には社会的にみて、功罪両面が混在する。た

だここで注目すべきことは、「餌づけ」に関する初期の誤認や誤解はともかく、予定外の現実がある程度認識された後までその事実を隠蔽しようとした学者・研究者としての犯罪性である。

私が日本霊長類学会に出始めた昭和四十年代にはすでに、京都学派に所属しない若手研究者の中からここに紹介したような指摘や批判が謙虚な姿勢で行われていた。それに対して、学会発表の進行中にニホンザル研究の先駆者およびその第二世代にあたる人々の口から発言者に向けられた悪口雑言は聞くに耐えないものがあった。

「餌づけ」されたニホンザルの集団生活には確かに、我々日本人の社会で伝統的に受け継がれてきたと考えられるような習性も発達する。その一端を具体的事例を通して説明するために、各々異なった理由からこれまで発表を差し控えてきた二つの個人的研究を次に紹介したい。

参考文献

今西錦司「生物社会の論理」、思索社（改訂版）、１９７１年

今西錦司編集著「日本動物記　全四巻」、光文社、１９５４～５８年

川村峻蔵・伊谷純一郎編「サル」、中央公論社、１９６５年

Konrad Lorenz「Studies in Animal and Human Behaviour」, Butler & Tanner Ltd., 1970

鈴木延夫「行動生物学のための心拍研究」、哺乳類科学、第42号、pp.１～９、１９８１年

鈴木延夫「エソロジーと学習理論」、サイコロジー、第13号、pp.50～57、１９８１年４月

鈴木延夫「エソロジー研究の現状と課題」、サイコロジー、第18号、pp.54～59、１９８１年９月

鈴木延夫「イヌの行動学」、獣医学１９８９、pp.２０９～２１３、近代出版、１９８９年

立花隆「サル学の現在」、平凡社、１９９１年

Norman Macbeth「*Darwin Retried*」, Kern Associates, 1971
N・ティンバーゲン（永野為武訳）「本能の研究」、三共出版、１９７５年

―ニホンザルの順位性に関する実験―

昭和四十五年、開設されて間もない京都大学霊長類研究所で私はニホンザル相手に一つの集団実験を行った。「餌づけ」された野猿公園や動物園のニホンザルにどうして順位関係が顕在化するのか。その際、集団の中で働く規定もしくは順位決定条件はなにか。個体同士はいつ、どのような条件下で互いに順位を確認するのか。また、食生活の条件から休息場所の選択、さらに交尾期の優先権まで決定するニホンザル社会の順位関係は、どのようにしたら崩壊するのか。それらすべての疑問や問題に答えを求めて、私は一連の実験をつづけた。

選んだ研究対象は昭和四十三年に捕獲され、同研究所の開設に合わせて引き取られた高崎山の群れの一部で、三十頭の牡集団から五頭を選り抜き、個体別に隔離飼育することから仕事に掛かった。

五頭の選択においては母集団生活時の各個体順位に注目し、ランクの高い者から低ランクの者まで、全体に分散するよう配慮した。また、隔離期間を六カ月とし、その間、各個体間の社会的接触を完全に遮断することによって、過去の順位関係が消滅することを狙った。さらに後の再集団化飼育実験を念頭に置きながら、日々の給餌時間に各個体が一日分の食事に費やす時間を繰り返し測定した。

実験内容は時系列に従って三つに分けた。最初の実験では個体毎に知的能力と体力を測定した。その結果、知的能

力の違いはともかく、実際に現われる体力面で個体毎に大きな開きが抽出された。体力測定で観測された最大値は自己体重の三倍、最低値はある個体の一倍半であった。

第二番目の実験では互いに相手を確認できる場面での対面テストを行った。このテストでは各個体が透明なアクリル板の前に座り、好物のサツマイモを各々十回奪い合う事態におかれた。またこの対面テストは一対一で始まり、五頭全員で一個のサツマイモを争奪するテストが最終段階に設定された。

この対面テストの結果、ニホンザルの牡の間で優位性が微妙に変わることが分かった。それを簡単に整理すると次のようになる。

一　体力テストで優れた成績を収めた一頭がすべての組み合わせ条件下で絶対的優勢を維持した

二　二個体テストで現われた優劣関係が参加メンバーの増加した条件下で、逆転する現象が捉えられた

三　すべての条件下でまったくサツマイモの争奪戦に参加しない個体が一頭確認された。この個体は事前の体力テストにおいても最低の記録に終わっていた

一見、ごく当り前の結果に思われるこの対面テストについては常識的解釈で割り切れない問題が含まれる。設定されたテスト場面の構造上、サル同士は互いに相手の姿を見ながら威嚇したり脅すことはできても、物理的に攻撃することはできない。したがって、体力の違いや多少の肉体的ハンディキャップがあったところで、どの個体にせよ大好物のサツマイモを巡る争奪合戦に参加しない理由はないものと考えられる。しかし、合計六十回のテストチャンスで、前述の一頭だけはサツマイモから最も離れた場所に身をおき、目線を終始足元に落として実験の終了を待ちつづけていた。

この繰り返し実施された対面テストを通じて、表情による威嚇現象はわずか二回観察されているが、個体間で常に利害が対立するゼロサムゲーム状況を考えた場合、当初から最優位個体と最下位個体が決まっていたこのテスト結果は解釈が難しい。他の生活条件に一切の違いがない以上、この結果は社会心理学的観点からのみ考えるべきであろうが、対面開始と同時に決定する彼等の優劣関係については、他の霊長類の仲間や動物一般でも考え難い。敢えていうなら、ニホンザルという動物は直観的判断が鋭く、しかも仲間の数の多少にかかわらず瞬時に相互の優劣認識が一致するという奇妙な事実以外、特別な解釈の入り込む余地は考えられない。

こうした一連の対面テストの終了を待って、第三番目の再集団化テストを開始した。このテストでは五頭のサルを一室に集め、一日一回の餌を一個の小さな餌箱で与え、対面テスト結果において断然優位な成績を収めた個体の平均的食事時間（七十五分）に十五分加えただけの給餌時間制限が設定された。したがって、このサル達が通常の順位性に沿って食事をすると、与えられた餌の量はともかく、少なくとも順位の低い三頭には餌を食べる時間がなく、適当な戦略をもって餌の独占を謀る最上位の個体から各自が餌を盗みとるか、あるいは餌箱からそのサルを一時的にせよ切り離すような方法がなければ、餓死の危機が日を追って迫るという状況にある。

第三番目に設定したこの実験は動物虐待の典型にあたり、一旦国内の専門誌で論文の採用通知を受けながら、実施から約三十年が経過する今日まで公の発表を差し控えてきた。しかし、日本人の社会が根拠のあいまいな天皇制を維持しつづけること、および年功序列といった明確な理由の分からない社会一般の序列制度を考える場合、この特殊環境におけるニホンザルの実験にはそれなりの意味があるものと考えられる。

ともかく、低順位の個体で餓死の危機がせまった四日間の実験を通じて、判明した結果は次のようにまとめられる。

一　餌を巡るどんな危機的状況においても、トップランクの地位はまったく脅かされない

二　第二順位の地位は常に下位の個体から狙われる

三　その際、第三・第四順位の二個体が協力して第二位の個体を追い落とし、狙った状況が安定した後、改めてその第二の地位を巡る戦いが始まる

四　当初の地位から陥落した個体はすべてのテストで最下位だった無気力サルからも攻撃され、最下位に転落する。その際、常に無気力だったサルは複雑な手順を踏んでボスザルの権力を利用し、餌場のメスザルだけが普段用いる戦略でも積極的に活用する

五　ボスから第二位のサルに向けられた威嚇や攻撃行動は、原因や理由の如何にかかわらず、漸次順位を下げながら最下位の個体まで波及する

六　上位の個体間で紛争が繰り返されると、ブービーと最下位の間で偽装された紛争が始まり、その際、ボスの餌箱独占状況が一時的に停止される。その結果、最下位の個体を除く第二位から四位までのサル達はある程度の餌を入手できる

七　この四日間におよぶ危機状況の中で、仲間から受ける頻繁な攻撃と飢餓状態の継続から生存の危機を迎えたのは最下位の一個体に止まった

この実験は本来、餌場に集まるニホンザルの日常的な順位制社会を問題にしたものではない。また勿論、野生ニホンザルの社会性について、この実験からなにかいえるというものでもない。ただその反面、我々日本人の歴史で伝統化してきた天皇制の問題や、年功序列社会の背後にある原理を再検討するにはある程度の参考になるものと考えられ

る。また、昭和二十年代に開始された一連のニホンザル研究を根本から見直す必要があるとすれば、動物虐待という点から二度と繰り返すことのできないこの実験結果には、特別な意義と意味が考えられる。後節で二十一世紀の日本人の未来を推定する際、その内容を総括的に取り扱う。

参考文献

鈴木延夫「ニホンザルのオトナオスにおける順位制度の実験的研究」、HBSR-P (S), 1979

—集団飼育ザルの順位性に関するテスト観察—

昭和五十三年当時、京都大学霊長類研究所の大放飼場に総数約六十頭余になる一群のニホンザルが飼育されていた。研究所の管理記録によると、その群れは福井県の若狭湾付近で捕獲され、研究所の付属施設として大放飼場ができた後、引き取られた群れであった。幸い、この大放飼場の隣に屋久島産の小規模なヤクザルの群れが飼育され、互いに群れ同士がコンクリートの高い壁を境として緊張関係にあったせいか、人為的環境下にあるニホンザルの集団としては統率性が高く、すべての個体関係や順位関係に安定性がある、という評価を同研究所の関係者から伝え聞いた。

その大放飼場でつづけた観察を通じて、前述の伊谷純一郎氏から河合雅雄氏に受け継がれた「ニホンザルの順位性社会」というものの実態をまず自己確認することができた。またその際、ミカンテストならぬリンゴテストで成獣になったオス同士の順位性における個体間落差や、テスト状況下で起こる様々な社会現象を観察した。

その中から伝統的な日本人の社会生活現象と比較できる内容の部分をまとめると、大略次のような点が注目される。

一　普段、多くのメスや子ザルに取り巻かれて生活していた第一順位のオスは集団の中でただ一頭だけリンゴが手渡された場合、突然奇妙な表情と発声を繰り返しながらその集団から離れた場所に移動し、そのリンゴを食べ始めた

二　その間、第一順位の周囲にいたサル達には特別な反応が認められず、意味不明の行動として受け取られた可能性が高い

三　こうした状況を毎日繰り返すと、第一順位のオスから奇妙な発声行動が最初に消え、引き続いて特殊な表情も消失した。ただし、テスト間隔を数カ月単位で開けると、第一順位のオスが当初にみせた特殊な行動現象の復活が再び確認された

四　日常生活での攻撃性が異常に高く、周囲からすべてのサルを排除していた第三順位のオスはリンゴが手渡された際、新たな威嚇行動や攻撃行動を起こしてから、遠く離れた場所に移ってリンゴを食べた

五　第一順位の場合と同様、こうした事態を毎日繰り返すと、第三順位のオスに突然現われる威嚇攻撃行動に低減する傾向も認められたが、完全に消失することはなかった。また、数カ月間の間隔をおいて再テストした場合も、初期状態まで攻撃性が復活することはなかった

六　順位落差の大きいオスの二個体関係では下位個体に直接リンゴを手渡そうとしても受け取らず、結局、近くにいる上位のサルが地面に転がったリンゴを争うこともなく獲得した。また、リンゴが下位個体の身体に触れているような場合、上位の個体は下位の個体をまず威嚇し、相手を追い払いながらリンゴに手を伸ばした

七　そこから追い払われた個体は場所を移し、まったく関係のない別の個体に攻撃を仕掛けたが、劣位の相手から反撃される現象はまったく観察されなかった

ここに紹介した七項目の内、一～三は我々日本人の社会で観察される照れ笑い現象と発生状況が共通しており、単独か少人数で好意的な視線を周囲から受けた際に我々が無意識にしてしまう東洋的微笑行動との類似性が認められる。また四～五は、普段から粗暴な性格の暴力団組員が周囲から視線を集中的に浴びる場合の状況と現象が類似しており、六～七の項目については日本人の子供社会で現在問題となっている「いじめ」とか「いびり」といった現象が内容的に重なる。しかし、飼育ニホンザルの集団で観察されたこの七項目にわたる現象の多くはテストの再現性に問題があり、独自の研究とするだけの条件に欠けているものと考え、今日まで公表を差し控えてきた。

―下北半島における野生ニホンザル研究―

日本各地で「餌づけ」されたニホンザルの群れの総数は昭和五十年までに、三十五群から四十群に達した。その一方、京都大学や大阪大学の研究者が対象にしていた「餌づけ」群で自然界では考えられない速度で個体数の増加現象が現われ、当初に観察されていたニホンザルの社会性に多様化傾向が指摘される一方、集団生活での順位性の混乱が若手研究者から報告されるようになった。

すでに述べたように、世界に先駆けて開始された日本の霊長類学には「餌づけ」という操作に対する誤認と誤解があった。また、観察現象に現われる研究対象の急激な変化に関する再検討の機会が遅れ、「餌づけ」群の認識を自然観

察対象から野外実験観察対象に訂正するタイミングを逃した。

私がここに紹介した二つの研究や実験を行っていた昭和四十年代半ばから五十年代に掛けて、日本霊長類学会や京都大学霊長類研究所で開催されるシンポジュウムでは先駆的研究者と若手研究者の間で激しい論争がつづき、時代はやがて「餌づけ」を人為的操作の一環として捉え直す方向で収束にむかった。

だが、日本霊長類学の基本的前提がこうして変更され、ニホンザルの「餌づけ」群が野生群でないとした場合、過去に残された研究の再検討や再編のために新たな野生群の発掘が必要になった。しかし、日本各地で主要な群れが「餌づけ」されてしまった後では、長期の観察や研究に耐えるニホンザルの野生群自体の存在が危ぶまれ、最後に本州の山岳地帯に生息する白山の群れと志賀高原の群れ、およびニホンザル生息地（世界の霊長類）の最北端にいる下北半島の群れと最南端の屋久島に生息する群れの研究が注目されるようになった。

その一つ、下北半島では昭和三十年代後半から南西部に生息する群れに注目が集まり、様々な状況や背景の下で現地のニホンザルが特別天然記念物に指定された。しかし、青森県や現地自治体の思惑から観光事業としての「餌づけ」が再び開始されるような事情から、下北半島に生息する野生ニホンザル研究のモデルとして当時、まだほとんど情報さえ学会に報告されなかった北西部の群れが最後に残った。

昭和四十七年十二月末、放飼場のサルや実験室の中のサルでニホンザルの社会性を問題にしていた私も、そうした学会の流れに合わせて下北半島の北西部に足を向けた。またその翌年からは京都大学霊長類研究所の嘱託員として足沢貞成君が現地に駐在するようになり、どうにか現地研究の基礎ができた。しかし、日本各地の「餌づけ」群に関する研究が順調に進むのに反して、この地区のニホンザルは容易に我々の前に姿を現わさず、冬期間の足跡を追い掛け

ても、群れの実態に迫ることはできなかった。

約三年後の昭和五十一年一月、人里から山岳地帯に向かって七〜十キロ離れた地域一帯で野生のニホンザルの一群が確認され、私を含む北大関係の若手研究者が現地に常駐して活動する足沢君を助ける形で、本格的生態研究が開始された。

当時、下北半島北西部では「餌づけ」群の伝統的研究から見落とされた生態学的側面、すなわち夜間の泊場、日中の遊動ルートと移動距離、冬期間のホームレンジや主要食物などの観察調査がつづき、天候や気温、あるいは積雪量の変動といった環境要因について克明な記録がつづけられた。

一旦、我々研究者をある程度の距離をおいて受け入れると、野生のニホンザルといえども、人間との日々の接触において突然逃げ出したり隠れてしまうような傾向は姿を消した。そのかわり、木の皮や芽を食べながら移動しつづける日中の遊動時間帯において、群れは数頭の小集団に分かれて広く分散し、各々樹間に隠れて全体が見えない。すべての行動や現象が何気なく始まり、気がつくと次の事態や状況が始まる。

長く研究されてきた日本各地の「餌づけ」群に比べ、一群に含まれる個体数が極端に少ない。とくに「餌づけ」群で常に報告されるような若いオスの見張り役が存在せず、我々研究者と群れとの遭遇ではいつも一〜二歳の子供を連れたメスが先頭に現われる。また群れの後方では三〜四歳のサルの姿が目につくが、やはりそこでも成獣に達したオスの存在が確認されない。

下北半島北西部に生息するこの野生群と「餌づけ」群との違いはまだある。この群れではリーダーと当時考えられたオスの短い尾が直立の位置にくることもない。また、オス同士の間で順位確認のために行われるといわれてきたマ

ウンティング行動が観察されず、仲間同士間の威嚇や攻撃行動もまったく見られなかった。

昭和五十年代初期に始まった連続観察期間中(約二カ月)、ただ一度だけ一群を構成するメンバーの総数をカウントする機会が訪れ、生後半年程度の子供を含めて三十二頭という数が確認された。

当時、この群れの周囲には人里から登ってくる野良犬が二～三頭から五～六頭の群れをなし、天敵の役割を果たしていた。他方、密猟者による日々の圧迫とか生息地内部の森林破壊といった状況も考えられなかった故に、標準的な野生群の規模として、この三十余頭という数字が学会で注目された。

ところで、従来の「餌づけ」群とこの野生群の間に存在する際立った相違点を人間社会との比較から眺めてみると、興味深いことが幾つかでてくる。その一つは、食物の奪い合いに終始して対立と抗争を繰り返す「餌づけ」群の社会が我々日本人の社会に共通点を持つこと。二つ目は、森林という自然環境に包まれて生きる野生群の場合、仲間同士の間で対立する条件が存在せず、したがって、わずかな土地や権力の奪い合いに終始してきた我々日本人の歴史から見ると、まったく異質な存在であること。そして最後に最も重要な点は、純粋に野生を生き抜くニホンザルの群れ生活には侵し難い威厳が備わり、我々人間に畏敬の念を与えて反省を促す、ということに他ならない。

下北半島北西部でのニホンザル研究がようやく発展段階を迎えた昭和五十年代半ば、この純粋に野生の群れに人慣れした四～五頭の若いオスが加わり、状況は一変した。下北半島南西部の「餌づけ」群から流れてきたと考えられるこれらのサルの出現以降、群れの構成数が毎年急激に上昇し、森林伐採後の人工造林地や天然更新地(伐採後放置された地域)を積極的に利用する傾向がこの群れでも定着し始めた。さらにもう一つ大きな問題は、この群れの生息地を含む一帯で巨大開発プロジェクト計画、つまり大間原子力発電所誘致計画が表面化したことである。

これら二つの問題の背景には勿論、人間社会の将来展望に欠けた観光開発とか地域振興開発の影響が直接または間接的に存在する。それはまた、人間社会との比較で野生動物の研究に意義を求めた私自身の学問の破壊に繋がり、強いては研究の中止や現地からの撤退を余儀なくされる状況となった。

参考文献

足沢貞成「下北のニホンザル」、ニホンザルの現状研究会編「にほんざる」第3号、pp.11～22、日本野生生物研究会、1977年

伊沢紘生「ニホンザルの生態」、どうぶつ社、1982年

伊沢紘生編著「下北のサル」、どうぶつ社、1984年

伊谷純一郎「高崎山のサル」、今西錦司編「日本動物記」第二巻、光文社、1954年

河合雅雄「ニホンザルの生態」、河出書房新社、1969年

鈴木延夫「霊長類の北限地帯に生息するニホンザルの群れ生活」、北海道大学文学部紀要、33ノ1、pp.239～270、1984年

和田一雄「志賀高原のサル」、講談社ブルーバックス、1979年

—北海道のキタキツネ研究（昭和五十年代後半）—

米作文化をすすめて近代や現代を迎えた日本人には本来、野生動物との接触に限界がある。だから、神話伝説に幾多の動物が出てくる欧米社会に比べ、日本では民話や童話に登場する動物の種類が限られ、その内容に各動物の習性を基本としたものが少ない。これは反面、日本人が野生動物に対して伝統的に関心が薄かった、という歴史的経過を

物語ると同時に、生き物全体を客観的に捉えようとする意欲の欠如を物語るものと考えられる。

一方、欧米で発達した生物学の中の動物習性学でも、民族の歴史や宗教の影響は免れない。だから、進化論が広く定着し始めた十九世紀後半から二十世紀前半においてさえ、彼等は動物すべてを人間と異なる存在と捉え、昆虫や鳥といった動物の習性学や生態学のターゲットを繁殖と餌の発見、獲得、保存といった問題に限り、対象動物の生活内容に人間生活やその社会と共通する側面が隠されている、といった発想自体が成立しなかった。

しかし、深く検討するまでもなく、人間が独自の存在であること、あるいは人間が他の動物と本質的に異なる存在であることを証明するには、必須条件として我々人間が相手の素性、とくに人間に近い生理解剖学的基盤と家族や集団といった社会的特徴を備えた動物の研究が欠かせない。しかもその点に注目して眺めてみると、日本はもとより、キリスト教を前提とする欧米社会にも、ひとまず同格の隣人として野生動物の生活を客観的かつ社会科学的に捉えようとする試みはなかった、ということも見逃せない。

その点、生理解剖学上の基盤を共有する霊長類の社会や生活に注目して大きな研究構想の下でニホンザルの研究に着手した日本霊長類学は、独創性の面で優れた学問的価値が認められる。しかし、すでに紹介したように、この学問の基本構想には少なくとも二つの面に欠陥がある。一つは生物進化を無条件に採用し、その頂点に人間を位置付けたこと。および、学問的要請に合わせて現実的障害や不可能な課題を当初から強引に盛り込んでしまったことに他ならない。

ある学問の成立において、証明されていないあるいは証明不能な仮定や前提は後日に問題を残す。学問の成立や発展において先験的仮定や基本的前提の設定は建築物における土台に相当し、その部分が不安定であったり崩れる危険

性がある限り、研究の結果蓄積される成果全体の信頼性と妥当性に不安を残す。

考えてみると、サルからヒトへの進化という前提を外し、森林から解放地へ出ることに抵抗する野生のニホンザルをひとまず対象からはずすことができれば、広義の比較社会学として独創的価値が認められる。すなわち、採食・繁殖といった基本的生態学の側面、子育て様式を中心とする家族生活から群れとか地域社会の成立や変動といった問題まで哺乳類全般に広げて研究する新研究領域がそこにある。昭和五十四年、私はそうした研究領域を「社会生態学」と名付け、人文社会科学の下でキタキツネとハイイロオオカミの社会的習性の比較問題から新研究に着手した。

我々人間にとって生育環境や生活環境の要因は人格形成から社会形成のすべてにわたって見逃せない。これをまずキタキツネ研究に当てはめると、動物自身が選択した自然環境に注目する必要があり、そうした自然環境の安定性が保証される範囲において、人間本来の姿との比較対照としてのキタキツネ研究の意味が成立する。

キタキツネは北海道全域に生息する。それを環境要因から分類すると内陸部、海岸部、都市部に分かれる。これはまさに、キタキツネという動物の生活様式における柔軟性や多様性を意味する訳であるが、これだけ大きな環境条件の違いがあるとすれば、この動物の基本的習性や生態が極端に異なるこれら三つの環境で別個の世界を作り上げる、という可能性もかんがえられる。そこで、キタキツネ生息に関する事前情報を検討し、日高支庁平取町二風谷（北海道アイヌの既存集落として有名）を内陸型、網走市能取岬を海岸型、そして札幌市の郊外ベットタウンとして有名な江別市大麻団地を都市型のフィールドに決め、院生学生の協力の下で組織的なキタキツネ研究に着手した。

一連のキタキツネ研究から得られた成果は次のようにまとめることができる。

一　この動物の解剖学的特徴は食肉獣であるが、実際の食性は典型的な雑食動物である。ただし、果実や栽培植物

を摂取しても、消化吸収率は極端に低い

二　主要食物は季節毎に大きく変り、各季節で最も簡便、かつ大量に採取できる食物を選択する（オポチュニスト）

三　その一方、食べる食べないにかかわらず、年間を通じて人間のすてた残飯や家畜死体を含むすべての食物資源の状況をチェックしつづける。その習慣によって、不測事態による主要食物資源の消失や不足状況に備えている

四　環境の変化・変動に対して不安感より好奇心が強く働き、すべての変動に積極的に対応する性格が顕著に認められる

五　育児様式は多様で、若年齢期のメス単独飼育型から老齢期の夫婦とヘルパーが加わる複合飼育型まで、母親となるメスの加齢進行に伴う様々な様式が存在する

六　人間に対する警戒心は内陸型が最も高く、都市型が極端に低い

七　人間に対する警戒心の低下に伴って子ギツネの交通事故による死亡率が急激に上昇する

八　したがって、都市部で繁殖するキツネの大半が年内に死亡し、人間社会内部への進出には、その点で一定の制約がある

九　内陸型・海岸型にかかわらず、観光客との接触を深めたキツネの多くは交通事故や狩猟を中心とする人為的影響の下で、生息密度の上昇や生息範囲の拡大に一定の歯止めが存在する

十　農薬や家畜飼料に含まれる有害物質の摂取を通じて、キタキツネの繁殖力や子ギツネの死亡率が高まる

エゾオオカミや大型の猛禽類が人間によって排除されたり減少してしまった北海道では現在、キタキツネ本来の天

敵は見当たらない。また、酪農地帯の拡大と人間の食生活から吐き出される残飯の増加増大によって、キタキツネの外見的繁殖力は本来のレベルをはるかに上回っている。しかし、一種の合理主義ともいえる彼等の特異な好奇心を前提とした便利主義（オポチュニズム）の結果、キタキツネは今、交通事故や農薬汚染といった人間社会の問題を否応なく共有している。また同時に、内陸部の調査地に選んだ日高支庁の平取町二風谷では沙流川ダムの建設でフィールドが埋没され、海岸部の調査地になった網走市能取岬は地域観光開発の一環として企画された大規模遊園地の建設でフィールドの破壊が起っている。さらに都市部の調査になった江別市大麻団地でも、突然建設されたゴルフ練習場の出現によって、すべてが破壊された。

これらを総合すると、我々人間の生活圏拡大によって一時的に繁栄する一方、子供の死亡率が急激に上昇してしまうといったキツネ特有の素性や性格が理解できる。ただ、こうしたキタキツネの素性を通じて、農薬汚染や交通事故にせよ、我々人間社会の抱える現代的課題の一部が同じ平面に見えてこないだろうか。これはさらに、便利主義者の典型といわれるキタキツネと現代に生きる我々人間自身の基本的性格との同質性を物語る、といったら過言だろうか。いずれにせよ、下北半島のニホンザルの場合を含めて、我が国には野生動物を本来の姿で研究できる環境はなくなってしまったといっても過言でない。

参考文献

鈴木延夫「動物の子育て―キタキツネ―」、発達、No.7、pp.90～96、1981年7月号

鈴木延夫「キタキツネの繁殖形態における多様化」、北海道大学文学部紀要33―1、pp.1～15、1984年

鈴木延夫「北海道におけるエキノコックス症」、哺乳類科学、Supplement No.2, pp.1～34、1985年

―オオカミ観の多様性―

北緯三十度辺りから六十度に広がる北半球一帯は現在の先進文明圏にほぼ重なるが、時計の針を逆に回し、同じ地域一帯を十八世紀の世界に戻してみると、我々はそこに数多くのオオカミの姿を見ることができる。

地中海に面した北アフリカと北欧三国の首都を各々起点にして東に目を動かすと、東経百三十五度付近で九州の南端からサハリンの北端がこの帯状の中に現われ、さらに東に向かうと北米大陸の主要部分を経てヨーロッパ全域の姿が現われる。

十七世紀後半に始まる機械文明の発達を契機に、南北約三千キロに広がるこの地域一帯は様々な民族の移動と拡散、建設と破壊の表舞台となり、血と涙の絶えない世界であった。またその間、この帯状の世界から数多くの動植物が姿を消したともいわれている。

私個人の関心事からいうなら、過去三百年の間にこの広大な地域から姿を消した動物の象徴としてオオカミが注目される。その一方、人間中心主義の独善で支配されつづけた同じ世界で衰退や絶滅に向かう他の動物とは逆に、外見的にせよ、繁栄の道を辿ったキツネという存在が見逃せない。

後者のキツネという動物については、前節でその特色を概観してきた。したがって、ここでは過去二千年余の間キリスト教徒に疎まれ、憎み殺されてきた前者のオオカミについて、文献と独自の現地調査を元に紹介してみたい。

世界の諸民族に伝わるオオカミ観を調べたカルロス・ロペスによると、我々人間が各民族、宗教、生活様式に別れて多様なオオカミ観を抱いてきたことがよくわかる。いうまでもなく、その一つの代表的例はキリスト教世界に共通したオオカミ観、つまり人間にとって最も疎むべき邪悪な悪魔という見方である。キリスト教の聖書に繰り返し出てくるこうしたオオカミ観は、牧畜文化に基盤をおく歴史的背景から単純に解釈されることが多いが、話はそれほど簡単に済まされない。

遊牧とか牧畜という点からいえば、モンゴル一帯にも同じような生活を営む人々が昔からいる。しかし、オオカミを忌み嫌ったキリスト教世界の人々と異なり、モンゴル地方の遊牧民はオオカミを神や祖先として敬う観念はあっても、相手を悪魔として呪う伝統は存在しない。これはつまり、我々人間のオオカミ観が日常生活に直結した利害関係によってのみ規定されるものではない、ということの証でもあろう。

北方圏に分散して暮す狩猟民族についてみると、人間のオオカミ観は一つの方向に集約される。互いに交渉の機会をもたない北方圏の各民族の間でオオカミという動物は常に人間を凌ぐ巧みなハンターとして尊敬され、畏敬の念を抱いて眺める存在になる。

日常生活における利害関係からみるなら、オオカミとこれらの狩猟民族は互いに同じ獲物を奪い合うという点から対立関係にも捉えられる。あるいはそこまでいえなくとも、互いに協力したり協調する関係は存在しない。とすれば、オオカミを神の座につけて捉えるこうした北方圏の諸民族の発想はどこから生れてくるのだろうか。

この疑問に対する答えは一つ考えられる。我々人間が自然と自己の関係を基本的にどう捉えるか。キリスト教のように神が人間のために自然を造り与えてくれたと考えるか、あるいは他の動物と同じように大自然に抱かれた一存在

として自己を認識するか、という原点の違いである。この原点に関連して考えた場合、日本人の伝統的なオオカミ観はどうなっているのか。

幸か不幸か、過去二千年ちかく米作文化に浸ってきた我々日本人にとって、オオカミという動物は遠い存在だった。元来、余り数が多くなかったニホンオオカミにとって、日本人の生活圏に主要な食物は見当たらず、人里に接近してくる理由自体が存在しない。また逆に、水耕栽培で米を作った日本人にとって、山岳深くに生息するオオカミの存在は日常生活の上からまったく無縁な相手だった。それ故、謎に包まれた未知の存在として曖昧な神々の座にオオカミを据えたことがあったとしても、日本人の伝統的社会の中では明確なオオカミ観を確立する前提に欠けていた、という話ですべてが終わる。

過去の歴史の中で日本人の大半は森林や原野を開拓した平地の農耕民として生きた。その例外として、東北地方の狩猟民といわれる「マタギ」の存在も考えられるが、古くからの記録に問題の多い「マタギ」をここで取り上げるには、条件が不足し、割愛すべきものと考えられる。

参考文献

ダニエル ベルナール（高橋正男訳）「狼と人間―ヨーロッパ文化の深層―」平凡社、１９９１年
バリー ホルスタン ロペス（中村妙子・岩原明子訳）「オオカミと人間」草思社、１９８４年

―アラスカのオオカミ―

オオカミという動物は我々人間社会の民族や宗教によって、まったく別個の存在として捉えられてきた。その一方、オオカミ本来の姿が研究の対象に選ばれることが少なかった。研究する替わりに、人間は世界中でこの動物を殺しつづけた訳である。

明治時代の記録によると、本州以南に生息していたといわれるホンドオオカミの最終生存記録は明治三十年代後半にあり、ハイイロオオカミの仲間であった北海道のエゾオオカミについては明治二十年代半ばに最後の捕獲記録が残されている。小型で南方系といわれるホンドオオカミの絶滅理由には疑問な点が少なくない。その反面、ヨーロッパから北アメリカの広大な森林地帯に生息していた仲間と同じく、大型で北方系だったエゾオオカミの絶滅原因については、人為的撲滅以外、これまで余り考えられていない。

断わっておくが、エゾオオカミの絶滅に一役かったのは先住民のアイヌではなかった。明治時代、北海道の開拓に合わせてアメリカから呼ばれた人々がオオカミの危険性を説き、当時の開拓史や移住者を促して絶滅対策に当たらせた、という事実がそこにある。ヨーロッパやアメリカの大地を人間のためにつくりかえたキリスト教文明の発想が、その際、再び働いたのはいうまでもない。

これまで紹介してきたような背景を元に、北海道開拓史の三代目として生れた私は一九七〇年代前半、人間性を探る格好の対象としてエゾオオカミの仲間で、アラスカやカナダに現存するハイイロオオカミをライフワークのター

ゲットに選んだ。

オオカミの研究を開始するに当たって、鉄のカーテンで閉ざされた旧ソ連領のシベリア一帯はフィールドとして選べなかった。また、北緯七十度までオオカミの生息圏が後退しているという北欧一帯も、考慮から外した。それからさらに現地情報の有無から考えた時、私がオオカミ研究で選ぶべき道はごく自然に、アラスカへと繋がっていた。

しかしそこでまた私は考えた。過去二世紀以上にわたって人間から迫害され、北極圏に向かって最後の退路を求めるオオカミの場合、人間すべてに対する警戒心が問題になる。その壁をどのように克服し、私という研究者をどのようにしたら彼等が受け入れるのか。

多くの動物を研究してきた欧米社会で、悪魔と考えられたオオカミが除外された理由はそれなりに分かる。ただそれにしても、戦後に発達した野生動物への関心が広がる北米社会で、まだ野生のオオカミ研究が進展しないのは何故か。そこには多分、宗教的オオカミ観だけでは説明されない前述の壁の他、事前に検討すべき課題が残されているに違いない。しかし、知識と情報に欠けた状態で幾ら考えたとしても、自分で納得する答えはえられない。

そこで私は生物分類学上、オオカミの仲間やなんらかの関係がありそうな動物の観察と飼育を始めた。その際、観察や飼育の対象になった動物は野良犬やアイヌ犬に始まり、キタキツネやギンギツネ、さらに北極圏に生息するブルーフォックス等、できるだけ多くの動物を手懸けた。

また一方、野生動物を研究するための基本姿勢や、必要な技術と特別な知識については下北半島でのニホンザル研究の中で、自分なりの努力をつづけた。またその間、一九八〇年に入手したディビッドミーチの「オオカミ」という本から必要な知識をかき集めた。

この本を出版して間もなく、ミーチという人物はアメリカを代表するオオカミ研究者となり、オオカミに関する国家プロジェクトで中心的役割を担った人間である。そのミーチが過去二十年の実績を踏まえて書いた彼の本の中でも、私が知るべきオオカミの習性や基本的性格の肝心な部分は、まだ未解明の課題として残されていた。

ミーチの本にはオオカミの体格や体型について詳細な記録があった。また、生息分布と密度についても、ある程度信頼できる資料が残されており、群れの統率に関するアルファメールやアルファフィメールといった特別な存在の役割についても、大枠の記述があった。しかしそこには何故、オオカミという動物が人間に多様な印象を与え、何故絶滅への道を一方的に辿ったのか、といった問題に対する回答は含まれていない。

一九八四年、最初に訪れたアラスカで、独自の研究を実現させるための十分な手応えを感じた。本物のオオカミの姿こそ見ることはできなかったが、アラスカという荒涼とした広大な大地に包まれていると、遠くから野生のオオカミの声が聞こえてきた。そして二年後の八六年、三月末から六月末に至る三カ月間の現地調査を開始する時期を迎えた。

参考文献

L. David Mech「The Wolf」, University of Minnesota Press, 1980

―オオカミ研究とその破綻―

近代文明と現代文明の表舞台はいうまでもなく、北半球の北緯四十度から五十五度の範囲に広がる。これに上下各五度の地域を加え、北緯三十五度から六十度の世界を眺めると、現代ヨーロッパ各主要都市ロンドン・パリ・モスクワ、そして北米大陸に移るとニューヨーク・シカゴ・サンフランシスコといった巨大都市が並ぶ。また我が国の中で東西に広がる東京・名古屋・京都大阪から北九州市などの中心ベルト地帯、つまり政治・経済・文化の中心部が北緯三十五度線上に並んでいる。

フランスの歴史でみると、十七世紀から十八世紀にかけて人間とオオカミの戦いが周期的に起こる。それも、国内戦や隣国との戦いが長くつづき、人間社会の混乱や疲弊が限界に近づく時期や時代に限って人間とオオカミとの大々的な格闘が記録されており、その点は注目に値する。

昭和三十一年以来、我が国は狂犬病の恐怖から解放されている。フランス史にせよ日本の中世から現代に至る歴史にせよ、野生動物から人間に飼育された動物を含めた比較的広範囲の動物の世界で突発する狂犬病の場合、長引く戦乱と深刻な自然災害の最中に蔓延し、人間社会の立ち直りに応じて再び姿を消してしまう、という特徴がある。

普段、この狂犬病がどのように自然界で潜伏しているのか、解明はまだされていない。それでも何故か、こうした狂犬病にまつわる国内外の歴史的事実はある程度正確な形で記録が残る。身近な例をとると、この狂犬病による死亡者が年間千人以上に達した唯一の記録は関東大震災の翌年にある。それに次ぐ我が国の悲惨な記録が第二次世界大戦

終結前後の昭和十九年から二十二、三年に集中している。

こうしてみるとヨーロッパの場合、キリスト教でおぞましい悪魔の烙印を押されたオオカミという動物は、人間世界の最も愚かで悲惨な状況下で突然姿を現わし、狂犬病の恐怖を混乱した人間世界に撒き散らしながら殺され、消滅させられた動物という印象が強い。またこの点を我が国に置き換えると厄病神のオオカミが野良犬や放飼犬に変わり、ごく最近までつづいた日本人の動物一般に対する嫌悪感へと繋がる。

一九八六年三月、アラスカの玄関口にあたるアンカレッジ空港はブリザードの吹き荒れる世界だった。そこから事前に予約していたレンタカーで六百キロ先のフェアバンクス市に向かい、二〜三日間の折衝と休息後に、アラスカ州の漁労狩猟管理局の支援と協力の下でアラスカオオカミ（ハイイロオオカミ）の調査地として推薦されたカナダ国境の町トックに辿り着いた。

管理局の現地支所ではまず、オオカミが地上で人間を許容する距離が四分の一マイル以上であること。各群の排他的行動圏が二千平方キロから二千五百平方キロに達し、出産と育児の初期にあたる四月末から六月末だけ、群れの移動が停止すること。また、オオカミの出産が集中するゴールデンウイーク前後の二週間は産室付近への接近を控え、観察基地の設置については確認した産室から少なくとも一キロ離れた場所でテントを張ること、といったような情報と指示を受けた。

同年四月中旬、トックの市街から南二十マイル地点の国道で親子三頭の群れを初めて発見。重い装備とテントを抱えながらその群れを追跡した結果、倒したヘラジカを食べる際、オオカミの食事様式が血液と内臓（一日目）・脂肪分の多い肉と他の筋肉（二日目）・残った皮の部分と肋骨を含む軟骨（三日目）と変わり、骨に手をつけた翌日には新た

な獲物を求めて移動する、ということを自分の目で確認することができた。

膨大な地域と数多くの野生動物を管理するアラスカ州ではオオカミの管理システムを統一するための調査基地として私に紹介されたトック支所を選び、そこに八十年代前半からスタッフを集めて組織的調査をつづけていた。その結果、私の研究の前提となるオオカミの生息数や群れの数と分布状況、主要な食料源となる動物の種類、さらに各群れ毎の産室の位置に関する知識と情報が保存されていた。

そこでオオカミの出産と育児の時期における様々な社会現象の詳細な観察という作業を考え、最適条件を調べた結果二つの候補地が浮かび上がった。その一つはトック市街から南東五十マイルにある深い渓谷で、オオカミのよく使う産室が谷底にあり、観察に適した約百メートルほどの丘がその脇にあった。しかし、この最適候補地にはその年、オオカミは産室を造らず、十頭を超えるオオカミの比較的古い足跡が近くの凍り付いた湖の上に残るだけだった。

第二の候補地はトックから北三十マイルにあるマンスフィールド湖の近くで、直径百メートルにも満たない小さな沼の岸に産室があった。

五月二十日、その産室から約一キロ、一つの低い林の丘の陰に観察基地を造り、夕方からその産室の対岸に移動してオオカミの出現を待ち受けた。

目の前の大きな池とでもいえそうな沼(湖)には渡り鳥が集い、繁殖期特有の喧騒がつづいていた。またコハクチョウの夫婦がいるその沼には次々と新たな鳥が舞い降り、体重が一キロから二キロもある大きなネズミ(マスクラット)が目の前で泳ぎ回っていた。

午後八時近く、対岸の巣穴の上に一つの白い影が浮かび上がった。西日を浴びて輝くその姿は一頭の牝オオカミ、

私の隣に並ぶ妻と中学二年の息子と三人一緒に見る最初のオオカミだった。

事前の話し合いで、私達三人の姿は露だったし、相手を見ても動かず、また隠れることもなかった。だから、私達が相手のオオカミを見ているとき、その相手もまた私達を観察していた。

私達親子を最初に発見したとき、若干の抵抗がそのオオカミになかったとはいえない。こちら側から見ていたその兆候は確かにあったし、一瞬、その場から逃げようという様子も観察された。しかし結果からいうと、わずか百メートルに満たない距離で、育児中の牝オオカミは人間を受け入れ、一日二回、朝と夕方の観察をその後一週間近くにわたって認めてくれたのである。

当初の帰国予定日が迫り、私達は現地からやむなくトックに戻った。それから管理局の担当官に現地で観察したすべての結果について報告し、その努力に応えて、担当官からはその群れに関する新たな情報、つまり群れを率いる牡オオカミの特徴と一年前に産まれている他の五頭の子供についても、詳しい情報が得られた。

しかし一年後の八七年四月、オオカミ研究が約束されていた筈の現地に再び訪れて見ると、雪の上に記されたわずかな古い足跡や食べ残した動物の骨の屑以外、オオカミの群れの存在を生々しく裏付けるものはなかった。

その結果をトックに戻って担当官に報告すると、群れの消失に関して考えられる理由が一つある、という返事が返ってきた。前の年、私達が現地から撤退して間もなく、アメリカのあるテレビ局が取材に訪れ、あの群れの産室から産まれた子オオカミを含めて、執拗に追い回していたというのである。

それでもともかく、私には人間の観察を受け入れる次の群れを探す必要が切迫していた。そして八七年この年、トックに入って約二カ月後の五月後半、どうにか子供を育てる新たな一群のオオカミを見つけ、現地ではピンゴスと呼ば

れるある特殊な地形の中にヘリコプターで辿り着き、一人分のテントを張った。

そのピンゴスの中では目の前七、八十メートル先に、オオカミの産室が樹間を通して見えていた。また、態勢を整えて少し待つと、私の視界に生後四週間程度の三頭の子オオカミが現われ、その場所がオオカミの育児の様子や夫婦関係の観察上、最高の条件を備えていることが分かった。だが結果から見る限り、それは私という人間の勝手な考えに過ぎず、子供を育てるオオカミにとっては許されない話だった。

観察を開始して間もなく、母親のオオカミが産室の近くの森林に戻ってきた。それから少しづつ場所を変えながら森林を震わすようなオオカミ独特の大声でその母オオカミが鳴き始めた。

その母オオカミと産室の上に現われている子オオカミ三頭、それと観察者としてそこにいる私の位置関係は丁度、二等辺三角形の状況にあったが、幾日経っても、その母オオカミは授乳したり子オオカミを連れて逃げ出すこともしなかった。

約一週間後、私の様々な努力のかいなく、三頭の子オオカミは衰弱が進み、死期が目前に迫った。そして最後の選択として私に残された道は現地の撤退とオオカミ研究自体の放棄であった。

後日、ベースキャンプ地のトックに戻って管理局の担当者と話し合った結果、この悲惨な成り行きの原因が判明した。それはアラスカ州で暮す住民の生活保証、つまり日本人を含む諸外国の金持ちレジャーハンターをアラスカに招き、ヘラジカやカリブー、さらにドールシープといった大型の野生動物を相手とする狩猟のガイド料で生活する現地のブッシュパイロットを守ることであり、その際、ハンターの獲物として喜ばれる動物達の天敵としてオオカミを駆除するアラスカ州政府の姿勢にあった。

確かに、このオオカミ駆除対策に先行してアラスカ州政府は全土に分布するオオカミの生息調査を繰り返している。それに従事するのは勿論、第一線のフィールドバイオロジストであり、調査結果についても信頼性についても問題はない。またそうしたオオカミの口減らし対策における効果と、相手の動物に与える数字上のダメージ計算にしても、論理的整合性は整っている。そこには間違いなくアメリカ人共通の社会的価値観、つまり人間中心の合理主義あるいはプラグマティズムが働き、日本の行政対策にみられるような曖昧さや不透明感は見当たらない。

しかし、一定の計算式に従ってすべてのオオカミの群れから交尾期や出産期の前半にヘリコプターとライフルを使って人間から追い回され、一族の仲間が殺されるオオカミはどうなるのか。

オオカミの研究自体を放棄することに決めた八七年の六月、ベースキャンプ地にしていたトック一帯のオオカミ八群についていうなら、半数の四群で子供が育たず、私が観察対象にした群れを含む二群で通常の半数、正常の出産と育児が進んでいたのは全体の四分の一に当たる二群に過ぎない。

こうしたオオカミ駆除対策の継続に関して、現地のイヌイットやアサバスカンといった先住民族は常に反対を唱えている。しかし、人間中心主義をモットーとする現地の白人社会の大勢は、あれから十年が経過した現在でも州政府の対策を支持し、いまもって毎年オオカミの駆除対策は継続されている。だからその限りにおいて、私の理想とするオオカミ研究のフィールドは現在のアラスカでは保証されない。また一方、オゾン層の破壊、深刻な酸性雨問題と広範囲な大気汚染問題など、最後の野生王国といわれたアラスカでさえ、多種多様な野生動物の生息環境の破壊が目前に迫っている。

参考文献

鈴木延夫「アラスカの雪原にて」、日本放送出版協会、1988年

―極東ロシア海域の海獣類研究―

アラスカでのオオカミ研究を放棄して五年後、カムチャッカにあるロシア科学アカデミーのある研究所から招請状が届き、ベーリング海と北太平洋とに南北から囲まれた島々（アリューシャン列島・コマンドル諸島）で繁殖する海獣類のトドを対象とする共同研究が実現した。

ペレストロイカ以前、米ソ対立の最前線基地となったこの海域では当事国以外の人間の立ち入りが禁止されていた。ましてや、海洋哺乳動物の象徴的存在となったクジラ類の捕獲や食物資源化、つまり国際捕鯨問題で米ソと激しく対立してきた我々日本人の場合、政府関係者の他、いかなる研究者といえども近づくことのできない海域であった。

英語で「海のライオン」と呼ばれるトドは、北緯四十度の北太平洋から北緯六十度辺りのベーリング海にわたって広く生息する海洋哺乳動物の一種である。この動物と最も近い関係にあるのはオットセイであり、アザラシ類の仲間といってもおかしくない動物である。

カムチャッカから届いた一通の招請状には二つの論文が同封されていた。一つはアメリカ海洋哺乳動物研究所のトーマス　ラフリンの書いた一九九二年の論文で、もう一つは招請状をよこしたウラジミールブルカノフ自身の最新論文であったが、その内容はいずれもトドという動物の世界的急減と絶滅の危惧を訴える論文だった。

元来、ニシンとかサケの漁場として有名な北海道各地の沿岸部では、これらの魚にスケソウダラを含めた魚類を追って南下するトドと、定置網漁業に従事する漁民が漁獲と魚網の被害をめぐって厳しく対立し、昭和三、四十年代には自衛隊まで出動してトドを撃退するという騒ぎまで起している。したがって、世界中でトドの急激な減少が事実だとすれば、北海道の沿岸漁民にとって喜ぶべきことに違いない。だが長年、この動物を有害な存在として国家ぐるみで殺してきた我が国の場合、国際捕鯨禁止問題の二の舞を踏む、可能性も無視できない。

考えてみると、経済社会の破綻した現在のロシアから共同研究の依頼状や招請状が届くという事態には本音と建て前の二つが考えられる。その内、調査費や研究費が欲しいというのが本音で、トドのこうした問題では日本も無関係ではないでしょう、というのが建て前の部分として考えられる。それを押し付けとみなすか、あるいは脅迫とみなすかの問題は別にしても、我々日本人にとって無視できない問題であることにかわりない。

また一方、私個人には昭和十八年五月末に起ったアッツ島での日本軍玉砕問題が常に念頭にあった。現地に駐留していた日本軍二千五百余名が勝算なき戦いの中で全滅したという確固たる歴史的事実は、その遺族が周囲に居る状況の下で忘れることができない。そして現在、米国領となっているアッツ島と今回の招請状に書かれたトド研究の調査予定地はそのアッツ島の向かいにあるロシア領のメドニー島だという。

ロシア語をまったく勉強する間もなく、私は九四年五月にカムチャッカへ向かい、ニ週間後の月末にメドニー島で英語のまったく話せないロシア人と繁殖地に集まるトドの研究に着手した。

現地での観察時間は朝六時から連続して夕方八時まで、観察項目は東西三百メートルの狭い海岸に上陸してくる個体総数の変動、出生する子供の数、個々のハーレム生成と消滅過程、ハーレム社会全体の変動などであった。

メドニー島は豆類の鞘に似た小さな無人島で、その最南端にある岬の観察地は五月末から六月一杯、濃霧と強風に終日包まれるツンドラの台地だったが、海岸から約二十メートル上の断崖に設営されたみすぼらしい観察小屋は理想的な場所にあり、野生動物の繁殖社会を包括的に観察するという点で、最高の条件を備えていた。ただ、私の目指した動物社会生態学上まさに理想ともいえる研究対象と観察条件に恵まれながら、そこには野生動物の社会を研究する際の現代的制約、つまり人為的圧迫と環境破壊という問題がやがて浮かびあがってきた。

問題の一つは魚網を被って苦しむトドの出現および、周囲に散乱する日本製水産関連資材とプラスチック製品の氾濫である。また次に問題になるのは、このトドと繁殖地を共有したり隣接地に繁殖地を求めて集まるオットセイの大々的狩猟問題である。その内、初めの問題はとくにトド固有の問題といえないので、ここでは後者の問題に注目してみたい。

オットセイは英語で「毛皮のアザラシ」と呼ばれるように、安価な毛皮やスキーの滑り止めに使うシールとして世界的に知られてきた。また世界有数の繁殖地が集まるアリューシャン列島一帯では、海洋民族であったアリュウト人がオットセイを主要な資源として活用したという歴史的事実もある。しかし、ここで問題にするオットセイの大規模な狩猟は、まったく別個の問題として注目しなければならない。

一九九十年代に入り、ロシア政府はアリュウト人にのみオットセイ狩りを認めている。しかし、オットセイばかりかトドの繁殖にも大きな打撃を与えるアリュウト人のオットセイ狩りの行く先を調べると、我々日本人の姿が突然、前方に現われる。

アリュウト人は現在、オットセイの肉を食べず、毛皮や牙を利用する生活をしていない。では何故、アリュウト人

のオットセイ狩りがつづけられているかというと、一頭当たり百キロを越すオットセイの肉がまずメドニー島から隣のベーリング島に送られ、そこでミンクの安価な餌となる。そのミンクが次に三百キロ離れたカムチャッカ半島に運ばれ、毛皮製品としての一次加工を施される。そして最後に日本を中心とした先進諸国に送られ、高価な毛皮となって市場に出回る。

七月初旬から目の前の海岸で、ロシア人に雇われたアリュウト人がオットセイの狩りをつづける。ロシア人の監督者の下で、十名前後のアリュウト人の男がトドとオットセイが共有する繁殖地の周囲でオットセイの集団を長い棒を巧みに使いながら一カ所に駆り集める。それから亜成獣といわれる三歳～六歳の牡を選び、次々に頭を叩く。頭を叩かれたオットセイの鼻からおびただしい血が流れ、その一部は窪んだ岩盤の上に溜まるが、残りの大部分は海岸の浅瀬に流れ込んで北太平洋の海を紅に染めていく。それと同時に、倒されたオットセイの胸にナイフが突き立てられ、沖合いに待つ船へ運ぶための一次処理が現場でおこなわれる。

毎年、メドニー島で捕獲が許可されるオットセイの数は二千頭。それをミンクの餌の量に換算すると約二百トンに相当する。その二百トンの肉から一体何匹のミンクが育つのか私は知らない。しかし、狩猟期間でいうなら四週間～六週間になるそのオットセイ狩りで、アリュウト人の手にする報酬が一人当りわずか百ドル前後に過ぎないという驚くべき事実は彼等自身からも、またロシア人の監督官からも聞いている。

こうしたオットセイ狩りがつづく限り、私にとってメドニー島でのトド研究は意味をなさない。少なくとも、オットセイ狩りが開始される七月以降は、本来の観察条件が破壊され、トドの繁殖社会の研究はもとより、生息数の減少問題に関わる他の習性学上の研究自体が無駄になる。

ともかく、私はこのメドニー島での研究を九四年と九五年の二年にわたってつづけた。その結果、ロシア人の二人の研究者の協力もあって、どうにかトドという動物の繁殖社会の生成から消滅までのデータは入手できたと思っている。事実、一日十三時間で通算四カ月間に及ぶフィールドデータは膨大なもので、そのすべてが詳細な分析や解析に値するなら、幾つ論文を書くことになるのか分からない。

いうまでもなく、このトドの研究も人間社会との比較対象とするには問題がある。その理由や原因は下北半島のニホンザル研究、北海道でのキタキツネ研究、さらにアラスカで着手したハイイロオオカミの研究にも当てはまる。人間社会から絶え間なく生み出される無数の欲望や際限のない経済活動の拡大が地球上でつづく限り、野生動物本来の姿を期待する研究は成立しない。

今西錦司氏によって創設された日本霊長類学から進化という概念を外し、人間と動物の社会を一つの平面に置いて考える私の社会生態学は、こうした現実の下で余儀なく終息することになる。しかし、ここに至る過去三十年間のフィールドワークや動物実験にまつわる様々な自己体験と経験を前提として、現在および二十一世紀に生きる日本人の姿について最後に言及してみたい。

参考文献

鈴木延夫「トドと人間の共存に関する研究第一報」、海洋と生物、第十七巻、pp.53～56、1995年

鈴木延夫「コマンドル諸島南東岬におけるトド（*Eumetopias jubatus*）の繁殖社会―繁殖地の個体群動態と世界的生息数の推定―」、ワイルドライフ・フォーラム、第一巻、pp.65～73、1995年

―ニホンザルと日本人―

下北半島で見ていた野生のニホンザルでは個体間の上下関係とか、優劣関係といった現象を捉えることができなかった。その反面、宮崎県の幸島や京都の嵐山などで見掛けた野猿公園のニホンザルではそうした関係が強く印象に残り、さらに京都大学の霊長類研究所でつづけた一連の実験結果から、一旦人間に屈服してしまったニホンザルの世界と我々日本人が伝統的につづけてきた社会習慣との間に、幾つか基本的な共通点を探ることができるし、さらにそこから我々日本人の近未来社会まで予測することも可能だと思う。それを整理すると次のようにまとめられる。

一　不文律と秘密主義

過去一世紀、日本人の社会は激動してきた。農山漁村の衰退と第二次産業の拡大、さらに第二次産業から第三次産業への移行など、村や町から大都市への人間移動も同時に起こった。若干の揺り戻しがあったにせよ、この流れはすさまじく、東京を初めとして国内各地方に百万都市を誕生させた。地方の衰退と大都市の誕生は同時に、日本の伝統文化を破壊し、日本人の特色や本質を消滅させたという話も聞かれる。果たしてそれは事実だろうか、また仮にそれが事実だとしたら、いつどんな事情や状況から日本人の特色は消滅に向かったのだろうか。

日本の伝統的本質の由来を柳田国男にならって「水耕栽培の米作民」と考えてみよう。日本人にとって米は歴史的

に価値の高い主食であり、貨幣であり、税金の象徴でもあった。一方、水田を耕作するには日本の自然環境にメスを入れた水利灌漑事業が前提になり、人々が一致団結して常に集団生活を堅持することが必要だった。水は高い所から低いところに向かって流れる。その流れに水路を設け、水を受け渡して米作を集団でつづけようとすれば、相互依存を前提とした村社会が自然にでき上がる。

定住を前提とする米作はまた、水害や飢饉といった自然災害が避けられない。そこから自然に祈る心と期待と不安の交錯した独特の信仰が起こる。それと同時に、経験と知恵を備えた人間を尊重しない限り、細心の注意と複雑な耕作技術を要求する毎年の米作に期待は望めない。

簡潔にいい切るなら、かくして日本人の特色、つまり村社会と縦社会、相互依存と自立性の放棄、前例主義と年功序列制度、神教と仏教の共存などが伝統化し、定着することになる。

我々日本人の常識的理解に含まれるこうした伝統や習慣は当然、それを生み出した水田稲作の衰退や後退と共に力を失う。昭和四十年代以降に始まった食生活の変化がまず米を主食の座からひきずり降ろし、米の増産計画が一転して減反政策に変わった。それは同時に、国家と共に歩んだ伝統的稲作文化が国家から見放され、無力化したことを意味する。またそれに引きつづいて全国各地の村社会が崩壊し、それを支えていた日本人の伝統と習慣の基盤が失われることになる。だが、一九九十年代のバブル崩壊の直前まで、我々日本人は不文律と秘密主義に則り、根拠の明白でない前例主義や年功序列制度において社会生活を営んできた。

ところで、野生のニホンザルを別格にするなら、野苑公園で餌付けされたニホンザルの集団や私が実験で用いたニホンザルの集団にも発生理由不明の順位性社会が成立する。しかも当然なことに、文字を持たないニホンザルの場合、

集団を構成するメンバーの大半が不文律としてそうした順位関係で共通の認識を抱えると同時に、自分の出番を間違わないために、あるいは上位個体の隙を捉えて食物を盗み取りするために、見て見ぬふりをしながら秘密裏に全体状況を把握する必要がある。その点、「見ザル、聞カザル、言ワザル」とは餌付けされたニホンザル、換言すれば小賢しい人間の軍門に下った堕落したニホンザルの本性に関してまさにいいえて妙なるものがある訳だが、果たして我々日本人の現状はどうだろうか。

生活空間が限定される村社会では親から子へ、子から孫へと引き継がれる不文律が成立する。また多くの構成メンバーが仲間の動向を観察できる村社会の状況では、知っていながら知らないふりをする秘密主義も成立する。しかし、親から子供に知識を伝えられなくなった現在、また周囲の状況がまったく分からなくなった大都市生活では不文律はもとより、秘密主義の成り立つ条件もなくなっている。したがって、長い間の伝統を支えた米作文化と村社会が同時に崩壊した現在、我々日本人特有の日常の生活習慣がアメリカ人の単純な合理主義に埋没していくことは避けられない。

参考文献

中根千枝「タテ社会の人間関係」、講談社現代新書、1967年

二　天皇制と国歌「君が世」

私は今、菅原道真の生涯を主題とした上下二巻の小説を読んでいる。勿論、これが小説である以上、歴史的事実に

加えて著者「高瀬千図」の勝手な想像や推測が随所に見られる。だが、今から一千年以上前の時代、現在に至る天皇制度の中で様々な私意が働き、天皇の存在理由や権威の由来を疑わせる話は見逃せない。日本史の専門書にも、歴代天皇の成立や継承に関するいかがわしい話はいくらでも出てくる。起源も不透明なら、継承の経緯も疑問ばかり。だがそれでも、国家としての日本から天皇の消えた時代はなかった筈だ。

平家と源氏、南北朝から戦国時代、豪族と豪族が武力をもって戦に明け暮れた当時も今も、我が国の天皇自身が武力でみずからの権力をもぎ取り、確固たる地位を固めた時代はなかったに違いない。だが、わずか半世紀前の無条件降伏の時ですら、米国の圧力に屈せず日本は天皇制を守り抜いた。では一体、天皇とは何者なのか、何故今更、我々日本人は天皇制を今日まで引き継いできたのか。

義務教育制度の中で強制的に歌わされる国歌「君が世」。その内容や意味を文部省は教えない。しかし、入学式や卒業式で「君が世」を歌わせない校長の処遇はどうなるのか。その点を問い正す国民の数も少なければ、今年の春、ある公立高校で起こった国歌斉唱拒否問題を交通事故のニュースと同程度に扱う我が国のマスコミ機関の良識も理解しかねる。また一方、今年の冬期オリンピックで日本人が優勝した時、歌詞の意味も分からずに「君が世」を聞きながら感激の涙を流した日本人は一体、何者なのか。

過去半世紀、日本人の教育水準は目覚ましく上がった。だから、コンピュータ時代の幕開けも、次々と広がるマスメディアの新時代も、日本人の若者達は当惑しない。積極的にそれらを取り入れ、その世界で遊んでいるのだ。だが考えてみると、我々日本人の感覚はどこかおかしい。意味不明の天皇と国歌を受け入れ、他方で高度なハイテク産業も簡単に受け入れる。集団や社会の頂点に立つ意味不明の天皇制とそれを称える国歌に国民。私はそこにみずからの

ニホンザル研究を重ねてみる。

顔を見ただけで相互の順位を確認し、合意に達する不思議なサル達。しかもその順位は、最も生活条件で優位な位置を占める最高位のボスザルの座において安定度が高く、極限状態においてすらその地位は揺るがない。何故か、その素敵な地位を狙う者が出現しないのだ。

一方、ボスザルの地位を何故か固定した上で、他のサル達は合争う。巧妙なタイミングと駆け引き。ボスザルの権威と権力を徹底的に利用し、死活を賭けながら複雑極まる戦術を考え出す本来の駄目ザル。約二百種といわれる霊長類の中でも、集団生活においてこれだけ複雑にして高等な生き残り戦略を編み出すサルは見当たらない。チンパンジーは確かに利口で、巧みに道具を使う。彼等の洞察力や道具を探す際の瞬間の閃きには、人間として頭が下がる。だが、そんなチンパンジーにしても、なにか訳の分からない理由で生まれるボスザルの利用戦略についていうなら、ニホンザルの足元にも及ばない。

日本人社会の天皇や国歌の不動性は驚異に値する。しかもその不動性や安定性の由縁として唯一考えられる理由が意味不明であること、およびその基盤不明の怪しげな権力に寄り添って名誉と地位を巡る本格的な闘争が開始されたり、長年にわたる日本の歴史さえ変えてきたという事実こそ、日本人が日本人を考える際の手掛かりになる、といったら間違いだろうか。

―日本人と犬、そして野生のオオカミ―

米作文化の時代以降、我々日本人にとって小鳥を除く動物の多くは有害な動物になるか、対決すべき相手に変わった。クマ・シカ・イノシシ・タヌキに代表される日本在来の動物がすべて貴重な農産物を荒す有害獣に変わり、人口の増加に伴う山間僻地への人間生活圏拡大がさらにその傾向を増幅した。

人々が米作中心の純農生活に移行すると同時に、日本人と犬の関係も変わった。狩猟を止めた日本人にとって犬は無用の長物となり、狩猟のお余りをもらえなくなった犬達にとっても、人間との共同生活は以来、質的な悪化を意味することになった。

熱帯や亜熱帯に起源をおく水田耕作の場合、温帯中心の日本の風土には問題がある。毎年、気候の変動が激しい我が国では冷害や飢饉が周期的に起こる。そこから多数の餓死者が生まれ、農村からはみ出した人々の死体が古くは京や大阪、また時代が下ると江戸といった大都市で氾濫し、その死体に人間から捨てられた野犬や野良犬がむらがった、といわれる。

人間が人間を食べるカルバニズムはもとより、人間の死体を食べる動物はすべて恐ろしい悪魔となり、憎みかつ忌み嫌う相手となる。しかも、犬を中心に伝染する恐ろしい狂犬病は戦争や大規模な人間社会の災害時に発生し、日本人と犬の関係は最悪の極を迎える。こうした歴史的事実は平安時代から始まり、戦国時代や江戸時代を経て、大正時代から昭和二十年代後半まで脈々とつづいてきた。

狂犬病が消えて十余年後の昭和四十年代半ば、そうした日本人の間で第一次ペットブームが始まり、第二次・第三次とつづいて今日のペット時代を迎えた。今から十年前の昭和時代末期、国内で登録された犬の数は約四百万頭、その他登録されずに飼育されている犬の数を加えると、独自の調査結果の示す総数は登録数の約三倍、一千二百万頭ということになった。

この数字を我が国の人口にあてはめると、ほぼ十人に一頭、所帯数でいうなら三～四所帯に一頭の犬が飼育されていることになる。この数字は犬の愛好家の多いイギリスには及ばないとしても、その他の欧米諸国に匹敵する。しかし、数から質に目を移すと、日本人と犬の関係が特殊化していることが分かる。

欧米の社会でいうなら、犬という動物は正当な育種学から作り出された動物であって、多くの犬種には数百年の歴史とそれを裏付けるマニュアルが存在する。そのマニュアルには各犬種の由来と飼育方法、さらに理想的モデルが詳細に描かれ、アメリカの本屋ではダイエット関係の書籍の数と肩を並べ、書店総面積の約四分の一が犬の歴史と飼育方法の解説書で占められる。

人間の食べ残した残飯をあたえることから始まった日本人と犬の関係は、その点でまったく異なる。紀伊国屋とか丸善といった日本を代表する書店に足を運んだところで、犬種の選択や飼育に関して信頼できそうな書籍は少ない。まして一般庶民が気軽に出掛ける街角の本屋になると、ペットブームを煽る幼稚な本はあっても、なるほどと納得させられるような書物はまったく見当たらない。それがまた、日本人と犬の奇妙な姿となって現われる。

日本人の多くは今でも、犬の散歩を犬のためにしている。雨や風の激しい日でも、決まった時間に決まったコースを歩いて犬に引きずられる日本人の姿が痛ましい。さらにその上、自分の一日三度の食事に合わせて犬にも食事を与

える人を見ると、おかしさ以上に涙が出てくる。

同じことは小型の犬にチャンチャンコを着せて歩く人の姿や、そんな犬を片腕に抱いてスーパーマーケットを歩く婦人の姿、あるいは自己満足から犬に過食・飽食を強制し、糖尿病や高血圧症の犬をつくって怪しげなペット病院に泣き付く日本人の姿にも現われる。

数年前のケンネルクラブの記録を見ると、日本人が好んで飼育する犬種に特徴が出ている。その一つは小型であること、二つ目は従順であること、そして最後は溺愛に無条件で応える犬種であることである。ちなみにイギリス人は中型の猟犬を好み、アメリカ人はチワワからドーベルマンまで、好みの範囲も多種多様で千差万別。そこに、各々の国の民族性が見られるのが面白い。

こうして人間の様々な要求や欲望に応える犬という動物は注目に値する。家畜にせよ様々なペットにせよ、これだけ勝手な人間の欲望に応える犬という動物こそ、私は「動物界の異端者」だと考える。その極端な事例は盲導犬であり、動物として当然持つべき己の欲望を捨て去り、人間に一生を捧げること自体が私の立場からは理解に苦しむ。近くにいるボスに怯えてリンゴに手を出さなかったニホンザルはまだ可愛い。しかし、盲導犬の姿はその範囲すら逸脱しているといえないだろうか。

犬とオオカミ、この両者の遺伝学上の違いはほとんどない。アラスカで「ワイルドドッグ」といえば、大抵オオカミのことだと分かってもらえる。また、発情期間に限って牝犬を野生のオオカミは受け入れる。だから、野生のオオカミの遺伝子を半分もった犬が日本にも輸入されるし、それが大都会の団地の中を歩いたとしても驚くにたりない。しかし、我々が犬と思う相手は人間社会に深く溶け込むが、野生動物のシンボルともいわれるオオカミそのものは決

して人間に馴染まない。彼等はただひたすら人間に怯え、不信感に溢れたまなざしで自然界の奥地へと姿を隠す。

人間を無条件で受け入れるペット犬と、完全な拒否反応を示すオオカミ。この二種類の動物が実は瓜二つの存在である、ということを理解できる日本人はいるだろうか。その違いが我々モンゴロイドと白人の間の違いしかない、という主張を聞いて頷く日本人はいるだろうか。

他の動物一般に対する完全なまでの無知、一千年余にわたる共存生活においてすらまったくオオカミを直接見ることも理解しようともしなかった現代日本人の祖先達。さらに一旦取り込んでしまうと、自分の子供以上に独断と偏見をからめて無我夢中でペット犬の溺愛に走る日本人。アラスカの大雪原で私の見たあのハイイロオオカミの群れにこうした日本人が遭遇したらと考えると、そこに特異な姿が浮かんでくる。

物事にはすべて多面性が考えられる。しかし、事実や現実の実像の一部も探らず、ただ目先の感情や動向に流される日本人。そこには他者に対する認識意欲の欠如と価値観の多様性を理解する土壌が欠けている。

参考文献

鈴木延夫「犬の心理」、アニマ六十三号、pp.68〜73、平凡社、１９７８年９月
鈴木延夫「犬と人間」、ＵＰ選書、第百七十号、pp.18〜21、東大出版、１９８６年
鈴木延夫「オオカミの虚像と実像」、ひと、Vol.21—6、pp.26〜37、１９９３年
中村禎里「日本人の動物観」、海鳴社、１９８４年
中村禎里「日本動物民俗誌」、海鳴社、１９８７年

―日本人とキタキツネ―

和人による開拓が始まって百余年、農道が網目状に張り巡らされた北海道では養鶏と養豚、および大規模な畜産業が発達し、その間隙を縫うようにしてキタキツネの繁栄がつづく。野生動物にとって一番重要な食物資源と移動ルートを全面的な形で人間に依存するキタキツネの生活にはまた、生活様式における多様化傾向が目立ち、観光客まで味方にする柔軟な生活態度はある意味で尊敬にも値する。その反面、野生本来の自然食を忘れ、得体の知れない人間世界の食物に手を伸ばすキタキツネの場合、広い意味で天敵となるべき人間の怖さを忘れている点に問題が残る。

休みなく発展する現代文明。その中に生きる人間の手によって勝手に変えられる環境に対応する柔軟性は、まさにキタキツネの真髄といえる。しかしその代償としてキタキツネが支払う代価も馬鹿にならない。頻発する交通事故、農薬汚染からくる体質の病弱化。親から子へ、子から孫へと引き継がれるこうした現実はキタキツネの未来に暗雲を投げ掛ける。

安楽に暮らすには簡便主義もいい。オポチュニズムも取り敢えず許されるかもしれない。また繁殖様式の多様化は人間の理想とする自由主義のモデルにもなりえよう。しかし、そのすべての代価として支払う体質の病的虚弱化、世代を重ねる毎に進行するこの問題にキタキツネは何一つ対策を考えていない。ましてや、依存の対象となった人間がキタキツネの狩猟と駆除を積極的に考え始めた現在、無防備な彼等が支払う代価は計り知れない。たとえ絶滅ということはないにしても、現存する個体の数が人間の手によって十分の一以下に落されることは十分考えられる。しかも

その時に至って、代々つづけた粗悪な食生活によって起こる体質の弱体化が種の保存に致命的打撃を与えることも避けられまい。

私の目前で学生達が繰り広げる現代の若者生活はこうしたキタキツネによく似ている。ファーストフーズとセブンイレブンですべてを済ませ、両親の援助に寄りながら各々が孤立した生活状況の下でテレビゲームとパソコン通信に没頭する姿は異様に見える。またそんな自分の子供の姿から視線を反らし、持て余した時間を温泉旅行とグルメの旅に一時の慰めを求めつづける親の姿も、キタキツネの親にどこか共通している。目先の安楽と平和と自由を手に入れる一方で各種の新型アレルギーや喘息、それに高血圧と糖尿病を抱えて生きる現代の我々人間とキタキツネ間に不一致点を探し出すことの方が難しい。

—ロシア人と日本人—

極東ロシアの海でトドの研究に従事していた間に、私はカムチャッカ半島を拠点に暮らす一部のロシア人と深く係わり、日本のマスメディアから伝わってこないロシア人内部の実像に触れることができた。そこでフィールドワークの副産物ともいえるその間の知識と個人的な実態観察を元に、ここでロシア人と日本人の国民性について言及する。

ロシア人は日本の古典文学や芸術に関心が深い。源氏物語の主人公や紫式部の話を聞きたいという女性がいたり、江戸時代の日本画について豊富な知識をもとに質問してくるロシア人も少なくない。またその類の質問に知識不足を恥じながら答えているとき、ふと我々日本人の心の中に深く溶け込んだロシア文学の存在にも改めて気付かされる。

私は明治二十年代半ばに生まれた両親に育てられた。そのせいかどうか、ペレストロイカ後のロシアで会った人々の内面や心理が私には不思議なほどよく分かるような気がした。彼等は皆、相手の目を直視することが少ない。建前と本音を同時に抱え、絶えず周囲の仲間の様子を観察している。

視線の片隅で同じロシア人の仲間に気を配る姿、私のような外国人に歓迎の言葉を大袈裟に掛けながら内心、対応に戸惑いの色を隠せない人々。怯えながら侮辱し、侮辱しながら怯えを隠し切れない複雑な心境。頑なに荒唐無稽化した伝統や習慣を守りながら、己の貧しさに恥じらいを見せる奇妙な姿。

貧しくとも学問や研究に専念するロシア人の若者。法律こそないが、密かに人種差別を行い、低学歴者を極端に侮る中年の男達。その一方で年功序列を唱え、権威と権力に迎合したがる老年期の人々。金を卑しみ、その金に泣くロシアの一般庶民。

第二次世界大戦直後、私はそんな日本人を周囲で沢山見てきた。差し出された物を左手で断りながら、すぐ右手を出して受け取る日本人。本人の内心とまったく関係のない挨拶に明け暮れる人付き合い。常に不平と不満を抱えながら一切それを口に出さない人々。家族同士の会話と他人を交えた会話がまったく異なる日々の生活。

「本心はともかく、人前で他人の悪口を言ってはいけません」とか、

「悲しくても人前で泣いてはいけません」

と教えてくれた自分の母親。そのすべてを想い出しながら今日のロシア人を見ると、彼等の内面や心境がごく自然に理解できたと私は思う。

隣国とはいえ、ロシア人と日本人の交流は少なく、人種的にも歴史的にも重なる部分はきわめて乏しい。その上、

気候も風土も宗教さえも両者に共通点は見当たらない。しかし、我々日本人はロシア人の小説に親しみ、古典的な音楽と芸術にも何故か憧れる。その親しみや憧れの背景には多分、相手に対する共感と理解がある筈だ。

だが一体、互いに相手の顔を見ることもなく歴史的に暮らしてきた日本人とロシア人の間のこうした共通点や相互の憧憬の由来はどこにあるのだろうか。現地でロシア人の陰影を含んだ対応を楽しみながら、私は幾度も同じ疑問にぶつかった。多数民族国家と単数民族国家、大陸型民族と島国の日本。残念ながら頭をどのように動かし、真剣に知的理解の糸口を探したところで、私には答えを出す術さえ見当たらない。

国際的な情報化時代と経済交流の規模が拡大しつづける現在、こうした日本人とロシア人に係わる共通点を洗い直すことにどれだけ意味があるのか判断しかねる。ただ、極東ロシアとの交流が一層深まると予想される日本の現状を考えた場合、北方四島の返還にさえ手間取る自国政府の不甲斐なさは、避けて通りたくともそれができない。とすれば、半世紀か一世紀前の日本人の姿に戻ってもう一度ロシアという国家とロシア人の思想や発想の原点を考え直すことも必要であろう。

北海道から北東を望み、二千数百キロ先のカムチャッカ半島で暮らすロシア人の顔を想い浮かべるとき、双方の共存と共栄の道を模索したくなるのは私の愚かさのせいだろうか。モスクワから約一万キロ離れた極東ロシア。もしそこに自立や自決の風潮が生まれたら日本、いや北海道はどう対応すべきか。私は時折、そんな仮定を前提に考えている。

―二十一世紀の日本人―

一　家畜人間社会の成立と終末

過去三十年、毎年大学に入学し、やがて卒業していく学生達を私は眺めてきた。その範囲も期間も狭い個人的経験を通じて、現在五十代の半ばに達した自分とまったく異質な相手に出会った記憶が一九七十年前後の時代にある。いわゆる七十年安保とか大学紛争という言葉が横行し、国内全体が大揺れに揺れたその時代、私は新米の大学助手という立場で全共闘に参加する学生の姿の中に新たな日本人の若者を見ていた。

あの時代、ヘルメットを被りゲバ棒を握りしめた学生達の目が光っていた。自分の大学の教官に詰め寄り、学問とは何か、大学教官の存在理由は何処にあるのか、といって相手を睨み付けた二十代前半の若者達。そして、単純にして明快な一個の学者としての回答を求める若者達に何一つ返事ができず、腰がひけたまま引き下がった当時の大学教官の姿が強く印象に残る。

計算上、一九七十年前後に二十歳の子供を持つ親といえば戦前派の最後か、第二次世界大戦で学徒出陣に刈り出された世代の人々になる。国家や戦争に恨みを残すそんな世代の親を持ったせいか、確かに、当時活躍した学生達には平和な戦後の日本にふさわしくない迫力があり、殺気すら覚える瞬間があった。しかし、そんな若者達が戦後の観念的平和国家思想に破れて黙々と大学を離れていって以来、多くの国立大学から殺気も活気もなくなってしまった、と

私の記憶はつぶやく。

一九六十年安保の時代、学生達は国家のあるべき姿を求めて全学連を組織し、的確な回答も国家から得られぬまま虚構としての平和思想に流された。それから十年後、戦地でからくも生き延びた父親や母親から生まれた団塊の世代といわれる若者達は、国家権力の陰に隠れて戦争責任問題を問い直すことのない国内の学者や研究者達に立ち向かい、何かを問い掛け何かを叫んで姿を消した。

もし、日本の若者が世界に注目されるほど躍動していた時代があるとすれば、考えられる期間は三つあるだろう。その一つは幕末から明治維新、二つ目は昭和十年代の第二次世界大戦の時代である。そして最後に日本人の若者の輝いた時代が昭和四十五年前後の全共闘時代だと私は思う。

この三つの時代や期間、日本人の若者達は己の人生を賭けて戦った。歴史的意味や内容に根本的な違いこそあれ、彼等は何かを希求して止まない若者であり、未来を希求して止まない若々しい魂を持った人間であった。またそこに別な表現が許されるとすれば、彼等には野生動物としての誇りがあり、己の死を賭けた激しい生への執着があった。

返事のできない相手に失望しながら大学を離れ、巷の片隅にひっそり姿を消していった団塊の世代の人々。その大学は今、四半世紀を経て彼等の息子や娘を受け入れる時代に入った。しかし、青春時代の絶望や失望を胸に秘めたまま学生の前に立つ団塊の世代の大学教師はもとより、そうした教師と同世代の両親の内面に流れる空しさの片鱗も理解できない今の学生の姿は、単純に騒がしいという点で数千羽、数万羽単位で飼われるニワトリの姿に通じ、本質的に従順だという点でヒツジの群れを彷彿させる。いうまでもなく、この二種類の動物は典型的な家畜の仲間であり、己の宿命も知らずに算盤を弾く飼主に甘えたり依存した生活しかできない愚かな存在にすぎない。

安全教育ばかりが先行し、人間として生きる意味を考えさせない我が国の教育制度。親が自分の子供に何も伝えなくなったこの社会。自立という言葉を教えながら子供達の自由な発想を小心故に束縛してしまう愚かな教師。何処の国にもある話とはいえ、人生経験も実社会の経験もまったくない若者を義務教育の教師に採用する我が国の教育制度。

テレビゲームと塾産業が発達したこの社会はすべての人間を家畜化していく。目先の目的や欲望こそあっても、本当のゴールがまったく見えない家畜の社会。それでも社会福祉制度と医療保険制度が確立される限り、家畜いや人間は死なない。死なない代わり、生きる意味の本質が失われる。

長寿国家の日本は発達した医療保険制度の下で人間が死ねなくなった社会であると同時に、人生の目的と目標を失った国民が死ぬことに怯える社会でもある。またそうした家畜社会を支えるために現代医学は限度のない発展を余儀なくされ、人々は死ぬ時期を見失ったまま労働の機会をひたすら求めつづける。

誰にでも分かるほど馬鹿らしいオウム真理教の出現に驚き、バブルの崩壊に国全体が動揺する現代社会はまさにノストラダムスの予言した世紀末の様相を示している。しかも、敗戦直後に慌てて選択した経済至上主義が根底から崩れようとする今、家畜人間に成り下がった我々日本人に自立や自決の道は難しい。

自由にせよ一時の平和にせよ、野生動物の世界なら休みない闘争を前提として成立する。ここでいう野生動物界の闘争とは排他的なものでなく、純粋な意味での自己防衛に限られる。もしその範囲を逸脱する個体が自然界で出現すれば、負の結果が必ずその個体や家族に戻ってくる。

相手の闘争心を抑制するなんらかの知恵と迫力がある限り、野生動物は野生動物として生きられる。だが一旦、他者に依存することを覚えた動物は野生を離れ、一時の安楽な時間を経て死か家畜の道に埋没していく。その道は一定

の方向に向かい、途中から逆方向に進んで成功した例は少ない。

二　二十世紀末の地球環境と文明

二十一世紀は目前にある。その新たな時代に生きる日本人を考えるにはまず、地球規模の環境問題と資源枯渇問題から考える必要があるだろう。

この問題についてはすでに数多くの出版物があり、テレビや新聞でも繰り返し豊富な情報を提供している。しかし、かって精神病理学が確立された当時に注目された人間の他者認識における理解と了解の決定的な違いはこの際、改めて問題となるだろう。人間には知的に理解する能力がある一方、理解した内容を自分の問題として取り入れる点にもう一つの壁がある。別な表現を使えば、我々人間に共通する特徴として「知る」ことあるいは「知っている」ことと、それを起点に生活したり行動するということが多くの場合、断絶しているということである。したがってここでは、人々の知的理解を内省的了解に変えて戴く上で野生動物の研究を通じて把握した私個人の経験的事実に即した広義の地球環境問題の核心を最初に検討してみたい。

米作文化に明け暮れた第二次世界大戦まで、日本人の衣食住すべてが国内の自然環境の受容範囲内で収められてきた。気候帯としての温帯は自然循環の中で多くの植物を育み、そこに生きる人間や動物に必要な生活資源を提供する。だから、人間が伝統に培われた親子代々の知恵を働かせ、願望や欲望に一定の自己管理ができる限り、伝統的な生き方をする日本人に終末はなかった筈だ。

生活資材として多様に材木を使いながらなおその森林を育て守りつづける伝統、己の排泄物を肥料に米や野菜を作

りつづける伝統。これに手漕ぎの磯船で獲る魚の文化と民間療法や東洋医学の範囲で病気の治療を収めている限り、平均寿命五十歳程度の日本人の持続性に問題は起こらなかった。しかし第二次世界大戦前後から今日への道はその基盤を離れ、天然資源の休みない搾取と環境破壊を前提として成立する欧米文化圏に参加した。その結果、我々日本人の生活基盤は世界中の天然資源と地下資源に依存しながら巨大に膨れ上がった。またその中で、地球規模の資源枯渇と環境汚染にも荷担し、資源や工業製品の販売ルートをハイエナやハゲタカのようになりふり構わず探し求めつづけてきた。その自己破滅的実態の基本的姿は私のフィールド経験にすべて収まる。

アラスカの冬、暗闇の大自然を日本製のスノーモービルが轟音と閃光を撒き散らしながら駆け抜ける。すると、現代文明圏から放出された窒素酸化物や硫黄酸化物による酸性雨と、フロンや代替フロンによって引き起こされるオゾン層破壊の恐怖が目前に迫る中で日本への材木輸出をつづけてきたアラスカの大地では野生動物が逃げ惑い、さらに奥地の森林や山岳地帯へと姿を消す。漠然と眺める限り、アラスカの広大な大地はそれでも我々人間を圧倒しているかのように見える。しかしそこで人間が受け止めるおおらかな印象は地球破壊という深刻な現実認識の欠如を物語る。

カニやサケで知られる北洋漁業の広大な世界、千島列島からカムチャッカ半島を経由してアリューシャン列島へと広がる大海原では今、サケやカマボコの原料となるスケソウダラの魚体に変化が起り、原因不明の小型化がつづく。またその大海原に点在する島々では日本製の魚網やプラスチック製品が散乱し、そうした沿岸部を渡り歩くトドやアザラシといった海洋性哺乳動物の生息数に急激な減少傾向が確認されている。

最近、環境ホルモンの出現が注目され始めた。本来、人間や動物の体内で生成されるべきホルモンが外界に存在するという話自体、どこか奇妙な気もするが、生命のリサイクルに欠かせない生殖器官を縮小させたり機能を極端に抑

制するという環境ホルモンの出現問題は私の場合、トドとアザラシの異常現象との関連で注目している。

三　環境破壊文明から自己破壊文明へ

二十世紀、日本人は欧米の機械文明を取り入れ、環境破壊を前提とする近現代文明への道を辿った。その中で日本人は自国の歴史と伝統を脱ぎ捨て、経済至上主義を前提とする先進諸国の主要メンバーとして名乗りを挙げ、その目標を貫徹する形で一つの世紀に終わりを告げようとしている。

戦争を避け、国内の平和と民主主義、それに個人主義と自由主義まで棚ボタ的に獲得した我々二十世紀末の日本人は敗戦直後に掲げたすべての目標を達成したといっても過言でない。ただその陰で、この文明が本質的に環境破壊文明であること、地球や環境の需給バランスを無視して狂奔した物質文明の終局に今立っていることを我々は見逃すことができない。

自然界の安定性は精密な循環論に立脚する。それを自然界の摂理というなら、二十世紀の文明はまさにその摂理を無視することで急速に発達し、またそれ故に不安定な社会から終局的破局への道を必然的に辿ることになった。自然界の包容力には限界がある。それを無視する限り、破局は時間の問題に過ぎない。

二十世紀の文明はまず足元の環境を汚染することから始まり、世紀末を迎える現在、人間の五感では物事の推移を捉えることのできない遠隔地の環境破壊と資源の枯渇へ進んできた。だが、地球規模で発生する酸性雨やオゾン層の破壊問題は足元で発生するダイオキシン等の環境問題と絡み合い、エイズや環境ホルモンを生み出しながらさらに新たな有害微生物の発生を促進する可能性も考えられる。したがって、二十世紀を環境破壊の時代というなら、この状

況がつづく限り二十一世紀は人間にとって自己破壊あるいは自己破滅の時代だというのは過言だろうか。

二十世紀を動かした論理と価値観は概ねアメリカ人の生活感覚に由来する。人間の感性と理性に訴えた実利主義と合理主義、際限のない自由主義とそれを支えるための経済至上主義。この四つの主義に自由競争の原理を重ね会わせたとき、二十世紀文明の本質が見えてくる。しかし、その推進母体になったアメリカ人の社会はともかく、第二次世界大戦後の無条件降伏から再スタートした我々日本人の場合は伝統的な他者依存あるいは強者依存型の発想と安直な精神論や机上の平和幸福論の夢に溺れ、こうした時代の本質を見抜けない。

各自の自由と自決を重んずるアメリカ人の社会では人々が自衛のためにピストルやライフルを手放さなかった。また、個人のプライバシーを守るためにアメリカ人の多くは多大な投資と自己負担を当然のこととして受け止め、自分達の自由な生活を保証させるために税金を払う。そこに私は野生動物と共通した生き方のモデルを見る。強引といわれようと傲慢といわれようと、アメリカ人の生き方には整合性がある。得られるものと捨てるもの。その両面を受け入れて生きるアメリカ人の社会は自己破滅の二十一世紀さえ、最後までしぶとく生き抜くに違いない。アメリカ人には攻撃的タフネスがあり、国家権力に翻弄されてきたロシア人には抑圧に対するタフネスが認められる。

先に説明したように、私には無条件降伏後の日本人社会が家畜人間の社会に思える。国家や社会を率いるに足るリーダーもなく、また一般庶民の中には無防備な依存症だけが蔓延している。生きる自由を与えてもらい、プライバシーを保証してもらうことしか考えないそうした日本人の中で、次に始まる自己破壊の時代に備える力は見当たらない。これからさらに科学や医学を発達させるにしても、それを駆使する主役のいない社会が今後もつづく。目先の問題に怯え、次の世代を念頭に入れることさえできない社会。人間生活に役立てるために発達させるべき手段としての科学

や医学。我々日本人はその手段にさえ翻弄されたまま、二十世紀末から二十一世紀の自己破壊文明へと向かう。

大学に集う若者達には今、生きる目的が見えない。また同時に、男女間の性意識が消え、自分の家族や子供を持つ意味など考える余地も見当たらない。否応なく飛び込んでくる時代情報や環境情報の処理に戸惑い、テレビゲームとパソコン通信に逃げ場を求める。人間としての現実感覚を失い、架空の世界にひたすら慰めを探し求める。

大学に入りながらも勉強や研究意欲を持たず、吉本ばななの「キッチン」等には無条件で共鳴する。人生の余暇を楽しむ初老の人々に混じってグルメブームと温泉ブームに意欲をみせても、自分の将来は考えない。それはまさに羊であり、ニワトリの姿に他ならない。頭上に迫る大気汚染も、足元に迫るヘドロの海も彼等は見ないし、聞こえない。今グルメを楽しみ、温泉に数人の仲間と出掛けられれば、後のことなど考えない。

現代のそうした若者達に悲観論や絶望感は存在しない。結構日々を楽しんでいるというのが実情のようだ。他人のことを考えず、将来の自分の姿を考えなければ、悲観も絶望も浮かんでこない。

多くの家畜やペットと同じように、現代の若者達に人間の絆など考えられない。自分がやがて死を迎えることなどまったく考えず、したがって両親との生活や死別についても考えない。考えても仕方がない、という結論が先にある。

二十一世紀、まず先進諸国の人間社会から自己破壊の時代を迎える。しかし日本人についていうなら、その点についての準備は終わったという見方が成立するかもしれない。皆が死ぬなら仕方ない。無理をしたってしょうがない。なるようにしかならない、という割り切り方がすでに定着しているのだと考えられる。

たとえこのままの道を人間社会が進むとすれば、生物進化の中心概念である「適応」または「適応性」は二十一世紀の日本人にも該当するだろう。それが最も省エネルギー型の生き方であり、人間や人類の消滅などと深刻に考えな

いところが自己破壊的時代状況に合わせた適応の適応たる由縁だ、と考えることもできる。

生も死も不確実だったすべての時代、人間は常に喜怒哀楽の中に生き、特殊な一生物として基本的に変わらない一生を送ってきた。しかし地球規模の環境汚染が進む一方でクローン羊を初めとする遺伝子操作学の発達が予定されるこれからの時代、地球と人間の運命や性格は過去の歴史に反して本質的な変化をみせる。それが自己破壊にせよ絶滅にせよ、将来が確実に予測できる限り、我々人間から悩みの種は消え失せる。

四　夢想的シナリオ

二十世紀末から二十一世紀を見渡すと、主役のいない自己破壊や自己破滅のシナリオだけが見えてくる。しかしここで仮に、我々人間全体が一つの合意に達することができれば、まったく別のシナリオも出現しうる。その合意とは日本を含む先進国が新幹線や快速電車を止め、すべての電車を各駅停車に切り替えることであり、残る後進諸国が揃って自給自足経済の復興に努力することにほかならない。

先進諸国にはもう発展する道は残されていない。そのかわり半歩や一歩時代を戻したところで、人々の生活の質は変わらない。ここにたどり着いた経済的豊かさは我々人間に齎したものより奪ったものが多すぎる。経済社会の混乱がつづくロシアの片隅で私は親子と夫婦間の愛情の基本を見てきた。それこそ、経済的豊かさで我々が失い、その破綻でロシア人が手にしたものに違いない。

社会保証制度がなくなったロシアでは真面目に働く親だけが家族を救う。子供達は否応なく父親の労働の意味を知り、粗末な材料から美味しい食事を毎日作る母親に尊敬のまなざしを贈る。そんな子供を見て親達は各自の役割を再

認識すると同時に、自己の存在感を確かめることができる。

一般的なロシア人の生活水準は今、日本の昭和三十年代前半に近い状況にあるかもしれない。だから知恵のある両親が努力すれば、人間らしい家族生活も目前に見える。またそこでは家族が健康で生きることの意味に重さがあり、家族で助け会うことに誰も疑問を感じない。

我々先進諸国の人間が一歩下がって考えることができれば、次の自己破壊文明の先行きはまったく変わる。それをするかしないか、人間はまさに自己の素性を証明する時代を迎えたと私は考える。

歴史的につづいた人間性の時代は不確実性の下で成立した。したがって、不確実なものを確実なものに置き換えようとしたときから、人間は別な存在に変わり、環境破壊文明から自己破壊文明への道筋がやがて生まれようとしている。その最後の審判は神ではなく、我々人間が下すことになるだろう。

参考文献

浅井　隆「大世紀末シンドローム」、徳間書店、１９９５年

小原秀雄「生物が一日一種消えてゆく」講談社ブルーバックス、１９８１年

黒井尚志「リサイクルの幻想と現実」、ダイヤモンド社、１９９４年

諏訪　勝「破壊」、青木書店、１９９６年

長谷川慶太郎・中西輝政「これからのアジア　これからの日本」ＰＨＰ研究所、１９９７年

本多勝一「知床を考える」、晩聲社、１９８７年

毎日新聞社21世紀危機警告委員会編「環境の世紀へ」、毎日新聞社、１９９７年

二十一世紀の日本人――家畜人間社会の終末シナリオ――
ヤスパース「精神病理学原論」、西丸四方訳、みすず書房、1971年
吉本ばなな「キッチン」、福武書店、1988年

―あとがき―

この原稿の最後の数ページを私は青森県の下北半島佐井村で書いている。人口わずか三千人のこの村では老人病で倒れるまで、人々は七十代でも八十代でも働きつづける。朝焼けと共に起き出し、日没と同時にストーブと電気を消して静かな夜を迎える。

親から受け継いだ小さな畑を耕し、捨てられた材木を薪にして夕食を作り暖もとる。知り合いの漁師から魚が届くと、そのお返しに自作の野菜を洗って相手に渡す。旅の人から予想外の贈物をもらうと床でも地面にでも頭を付けて感謝の心を表わし、感激に涙をこぼす老人もこの村では少なくない。

ある一人の老婆に過ぎ去った人生を尋ねると、一瞬の時間的空白の後から「この歳まで一生懸命生きてきましたので、それを考える時間もありませんでした」という答えが心地よい笑い声と一緒に返ってくる。その老婆は腰が九十度に曲がり、字は読むことも書くこともできないという。そして子供達二人は「都会に取られてしまいました」といってまた笑う。百八十年前に建てられた先祖伝来の木造の家に住み、夫婦揃って言いたい放題の会話を毎晩楽しむ。その姿に死を恐れる様子は見当たらない。

天然記念物のカモシカやサルに大事な畑を荒され「憎いこと、本当に」という反面、「でもあの人達もひもじいでしょ

うね。仕方がありませんよ、皆生きているんだから」という言葉がその後につづく。不便な土地に住み、貧しく一生を終えるその姿から、私は次の世紀に考えられるもう一つの希望のあるシナリオの原形を探してみたい。

野生動物は質素に生きる。すべてが限度をわきまえ、無意味な欲望には常に自制心が働く。仲間同士の戦いにはルールがあり、敗者の宣言は相手の攻撃を静める。一定の寿命を甘んじて受け入れ、それ以上を望まない。とくにこの地球上で頂点に立つ猛獣や猛禽類に、こうした自己管理の秩序が強く現われる。

生物界の基本に基づく世代交代の意義を忘れ、甘えと他者依存の傾向に満ち溢れた家畜人間の社会に未来はない。質素と倹約をモットーに生きた伝統的日本人への回帰こそ、次世紀に生きる人々の唯一選択すべき道だと私は考える。決断は一つ、それまでに許される時間は少ない。